

報告書（アンケート調査）

日本の研究者と英語の必要性：  
日本の高等教育研究機関における英語サポートプログラム構築のために

平成24年9月28日

崎村耕二  
深田智  
河野亘

## アンケート調査の概要

【名称】 「日本の研究者と英語の必要性——日本の高等教育研究機関における英語サポートプログラム構築のために」

【目的】 英語論文の作成や、英語による口頭発表・討論等、学術目的の英語の運用にあたって、日本の研究者たちが直面している状況や問題を調査し、支援のための方策を探る。

【方法】 質問項目への回答、自由記述等による。

【対象】 日本国内でトップレベルの高等教育研究機関（大学院研究科）において高度な学術研究に従事している研究者。（助教、講師、准教授等の研究教育職に就き、独立して研究活動を行っている自然科学・社会科学・人文科学の諸分野の学術研究者を対象とする。その第1言語が日本語であることを想定する。）

【期間】 平成23年9月下旬より約1か月の期間。

【基金】 主な基金：平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金—挑戦的萌芽研究）「学術英語テキストの分析を英語論文ライティングサポートに繋げる研究システム整備」

【研究代表者】 崎村耕二

【回答要領】 選択肢からふさわしい番号を選んでもらった。選択肢にふさわしいものがない場合には、「その他」を選び、空欄に記入を依頼した。

【発送数】 1227名。

【回答者数】 320名。

【人的態勢】 次のグループを編成した。

崎村耕二（京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科 教授）  
深田智（京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科 准教授）  
河野亘（京都大学 大学院人間・環境学研究科修士課程 院生）

上記に、事務補佐として京都府立大学文学部2回生[当時]藤村莉那が加わった。

## 【背景】

日本において学部から大学院へ進み、博士後期課程等を修了後、研究員、助教、講師、准教授等の研究教育職に就いて独立して研究活動を行っているということは、すでに教育（専門教育）を修了していることを意味する。言い換えれば、専門分野における一定水準の技能・知識・見識を修習していることを意味する。学位を取得したのならば、そのような「修習」の内容と水準について正式な認定を受けていることになる。教育を終了している訳であるからもはや独り立ち可能な水準にあるはずである。専門の研究についてはその通りであろう。しかしながら、研究成果の発表に必要な英語のライティング技能、英語による口頭発表の技能や討論の技能について、教育課程の中で実質的な訓練を受けているとは思われない。学部課程における英語教育は学術目的に照らせば基礎レベルにとどまり、大学院における教育プログラムはその大部分が専門教育で占められているため学術目的の英語教育はほぼ皆無だと考えてよい。各大学の大学院教育プログラムにおいて、上記のような学術英語目的の科目を開設するなど一定の配慮がなされている事例は見受けられるが、ほとんどがきわめて小規模な、1～2科目程度の受講のみで完結している。そもそも学術英語の訓練のために——つまり専門教育以外に——相応の時間を割き、一定の成果を上げることができるほど専門教育プログラムには余裕がないのが実態である。大学院教育を修了した段階で、学術研究者に求められる英語技能が一定程度習得されているかどうかといえ、それは保証されていないのである。（もちろん日本文学や日本史等、日常の研究活動の中で英語の重要性が低い分野も多いことは事実で、その方面はここでは視野に入れない。）

そのような状況を踏まえ、現に研究活動のただ中にいる研究者を眺め渡すと、個人的努力と各自の方法にほぼ委ねられているように見受けられる。所属研究機関で組織的かつ継続的な研修あるいはサポートが得られないのであれば、これらの研究者たちは、研究成果の発表という日々迫ってくる要請にどのようにして応えることができるだろうか。あるいは、価値ある研究成果を世界へ知らしめたいという学問的野心をどのようにして達成できるだろうか。途方にくれてしまう若手研究者も多いかと推察される。研究水準と目標が高ければ高いほど、壁も厚いであろう。

もちろん他方で、研究能力とあわせて類い希な語学能力を備えている人たちや、並々ならぬ自己努力によって高度な英語技能を身に付けている人が存在するが、彼らにとっては上記のような苦労は他人事であろう。また、そもそも上記のような切実感を持たない人もいる。医学やバイオの分野では、英語に対する要請が切実であるが、自然科学の分野であっても切実感が少ない分野も見受けられる。人文・社会科学系でも、強い切実感と高い意識を持つ人がいる。特に大学院博士後期課程レベルが分かれ目であり、その後の語学力の展開は、この段階における本人の目標設定と意識の高低に左右されるようである。先に述べたような事情で、大学院教育における言語運用技能の訓練はきわめて不十分であるため、英語の場合、残念ながら、学部以降ほとんど英語の能力が向上しておらず、学部レベルか、学部生にも劣る大学院生に出会うことも多い。また、自分は英語が出来ると思っているという自己評価は、必ずしも真の実力と対応しない。これらの方面は、ここでは、視野の外におくことにする。

本アンケート調査の背景にあるのは上記のような事情である。このような背景のもと

に我々が取り組みたい課題は、第1に、教育課程を修了して独り立ちした研究者たちが、英語論文の作成や英語の口頭発表、さらには海外の研究者との交流等で英語を巡る困難に出会っているとすれば、それはどのようなものを把握することである。第2に、彼らはどのようなサポートを求めているのかを調べることである。第3に、サポートを提供することができるのであれば、それはどのような内容であり、どのような方法で行うべきかという課題である。このような課題は、いくつかの小さな切り口を見つけなければなかなか現実的な取り組みに結びつかない。そこでアンケート調査では、一般的な質問とあわせて、次のような話題に関する問いかけも行った。①特に困難を感じる文法的側面（前置詞、冠詞など）について、②英語論文作成にあたっての「英文添削」と専門業者への委託について、③海外の研究者とのソーシャライジングについて、などである。

### 【アンケート調査実施について】

平成23年7月より週1～2回（8月の一部を除く）の頻度で会合を開き、設問項目、調査対象（名簿）、発送方法等について検討を行なった。

平成23年9月下旬から10月にかけて、主に京都大学大学院に所属する若手の研究者（1227名）の方々に対し、アンケート用紙を配布した。対象は、京都大学の大学院研究科に所属するすべての助教、講師、准教授の名簿を、京都大学HPの公開情報により作成し、アンケート対象者名簿とした。京都大学は多くの優秀な研究者が集まる大規模な総合大学であるという点、つまりその研究水準と研究分野の多様性、それから、国際的な発信力の高さに照らして、本調査の趣旨にふさわしいと判断した。

教授を入れなかったのは、比較的若手の研究者の方々が最も痛切にサポートを求めているであろう、という見込みがあったためである。もちろん年齢的に、助教、講師、准教授の方々がすべて若手に属するというわけではないであろうし、教授がサポートを求めている、とも言えない。しかし、今回の調査の目的は、誰がサポートを求めているか、ではなく、どのようなサポートが必要か、という課題を探るための基礎情報を得ることであったので、最も切実な声が聞こえてきそうなところに投げかけた。将来的には、対象範囲を、他のいくつかの大学に広げることできるが、今回はとりあえずどこかに投げかけてみる、という試みを主眼とした。

次に、アンケートの設問の構成について概略を述べる。形式上は、設問に対して選択式で答える形と記述式で答える形の二種類とした。選択式には複数回答可能なものを含んだ。また、「その他」という選択肢を設け、その内容を適宜記述してもらう形をとった。末尾の設問は、研究者の立場からの英語に関する見解、感想、体験談等を自由に記述してもらうものとし、スペースをたっぷり設けた。このアンケート調査は、学問的な仮説の証拠立てを目的としているのではなく、あくまで、現実に起きていることの多様な実態を探り、こちらが予想していなかったような情報や回答者の意識を可能な限り引き出すという目的を重視したためである。

320名の方々から回答が寄せられ、回収率は約26%と算定した。この回収率を高いと見るか低いと見るか、については、いくつかの観点で評価を与えることができるだろうが、我々としては、忙しい中、4名に1人の割合で回答いただいたことを、感謝の気持ちで受け止めたい。まず、英語は、多くの研究者が日夜取り組んでいる専門の研究にとって周辺的あるいは二義的な意味しかもたない。したがって専門とは無関係であるとして棄ておくこともできたはずである。しかしながら、あとで述べる通り、回答者の記述の中で見え隠れすることは、英語の重要性に対する強い意識である。つまり、専門が何であれ英語の運用能力が研究成果の発表のために欠かせないものである、という強い意識と、現実に英語でいかに苦労しているかという嘆息のようなものである。

さて、回答を送り返さなかった研究者についても考えてみたい。英語は多くの研究者にとって周辺的な課題である。そもそも英語との接点が少ない分野からの応答は期待できないであろう。例えば日本文学、中国文学等である。また、使用言語が英語と競合する分野、例えばドイツ文学やドイツ哲学では、ドイツ語がここで言う英語の機能を持っているのでその意味では英語への関心は少ないであろう。（もっともフランス関係の方からの回答が寄せられ、その方にとってはフランス語が英語に代わるものである、ということが判明した。それでも回答を寄せていただいたことは、言語使用のあり方に関する学術的な関心または協力的な善意によるものだったのであろう。）

また、逆に、研究活動の中で英語に関連する側面がほぼ問題なく動いている場合には、「英語に関して何か問題を抱えているか」「どのようなサポートを求めているか」という前提で作成されたアンケートに回答する意味が無い、ということが考えられる。以上の二つの方面からは、回答が投げ返されなかった、と推測することができる。

なお、この問題に関しては集計の段階で、アンケート用紙の設問構成に反省すべき点があったことに気付いた。つまり回答者に対して、その研究分野を尋ねなかったことである。回答者の研究分野、すくなくとも「自然科学」か「人文・社会科学」かの区分さえわかれば、回答内容の分析に大いに参考になる面があったはずである。研究分野が不明であるため、研究分野の一定の傾向を読み取ることができなかった。実はこれは、設問項目の検討段階で、「研究分野の詳細を尋ねると、母集団が約1200とはいえ、京都大学の中で個人が特定されることがあり得るので、無記名を前提にして回答する回答者に心理的な影響を生むのではないか。研究者を研究分野から切り離して問いかけよう。」という配慮によるものであった。しかし、その配慮を生かしながらの問いかけ、たとえば、こちらで大きな区分を設定して「社会学・心理学・認知科学」「法学・経済学・商学」「文学・芸術」「医学・薬学」「工学」「生命科学」等から選択させることもできたであろうし、最低限「自然科学」「人文・社会科学」のいずれからか選択してもらうことで問題なかったはずである。この件については今後の課題としたい。また将来的には、特定の研究分野を対象として調査を行うこともできよう。

さらに、本調査に関する課題として、回答者の年齢も尋ねなかった、ということがある。「若手研究者」が我々の関心の対象であったが、名簿作成の段階で年齢を把握することは不可能であったため、准教授、講師、助教という職階を手掛かりにした。もちろん、教授を含めた職種・職階は、年齢の高低と必ずしも相関関係にないことは周知の通りである。ただ、大学院の正規課程（博士後期課程など）終了後何年経過しているか、

という聞き方は本アンケートの趣旨に適った質問であったと思われる。研究者として独り立ちして以降サポートを得ることができない状況が我々の最大の関心事だからである。

さて、この種のアンケート調査は、回答の負担を考えて、分量に配慮すべきである、ということがよく指摘される。今回のアンケートは、選択式を中心に回答していけば15分ほどで回答できたはずであるが、回答者の中には、記述による詳しい回答を返していただいていた方が多かった。おそらくかなり時間がかかったものと思われる。そしてその記述内容には非常に貴重な情報提供や意見の表明が成されていた。そのため、数値によって示される事実の分布だけでなく、滅多に聞けない現場の研究者の生の声を聞くことができた。

【設問の構成】 何を問題にしてどのような表現で質問を投げかけたかだけを下に示す（個々の設問の選択肢は省く。）主な主題を見出しで示し、各設問にはA～Uの通し記号を付けた。

《研究上の英語の使用状況と重要性について》

- A. あなた自身の研究環境・研究活動において英語はどのように使用されていますか。
- B. 研究成果を英語で論文にまとめ発表することは、あなたにとってどれほど重要ですか。  
(1. 0% 2. 25% 3. 50% 4. 75% 5. 100%)
- C. 上記 B で「1 (0%)」または「2 (25%)」を選んだ方にお尋ねします。その理由は何ですか。
- D. 上記 B で「4 (75%)」または「5 (100%)」を選んだ方にお尋ねします。その理由は何ですか。

《あなたが受けた教育について》

- E. 大学院レベルで、英語が使える研究者を養成する教育プログラムを提供されたことがありますか。（教育科目を受講した、講習会に参加した、等）
- F. 上記 E で「ある」を選んだ人にお尋ねします。それはどのような内容でしたか。
- G. 上記 E で「ある」、「ない」いずれを選んだ方もお答え下さい。あなた自身が今教育または訓練を必要としているとするならば、どのような内容ですか。

《英語使用の諸問題について》

- H. 英語で苦勞した経験、あるいは現在苦勞していることについて、お尋ねします。学術目的でのリスニング、リーディング、スピーキング、ライティング、ソーシャライジング、文法的側面、の観点からご回答ください。

《ライティングの添削について》

- I. 今までに、英語論文作成などにあたって他者に添削を依頼したことがありますか。
- J. 上記 I で「1. ある」と回答した方にお尋ねします。ライティングの添削を誰に依頼あるいは委託しましたか。

K. 上記Iで「1. ある」と回答した方にお尋ねします。依頼あるいは委託した経験に照らしてご回答ください。添削をどの程度受け入れましたか。

L. 上記Kで「1. すべて、あるいはほとんど受け入れた」または「2. かなり受け入れた」と回答した方にお尋ねします。添削のおかげで学会誌等にアクセプトされるレベルに達したと考えますか。

M. 上記Jで 2, 3, 4, 5のいずれかを回答した方にお尋ねします。添削を依頼した際に、謝金などのお礼をしましたか。差し支えない範囲でご回答ください。

#### 《翻訳・添削の専門業者について》

N. 上記 J で「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。次のケースのいずれですか。1. 日本語で書いた論文を丸投げして英語に翻訳してもらった。2. 自分で書いた英文を添削してもらった。3. 回答できない。4. その他（次の空欄にご記入ください）

O. 上記Jで「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。翻訳または添削サービスに関してどのようなことを感じましたか。a. 料金について b. 納入までの時間について c. 納入までの添削のプロセスについて d. 委託したサービスの満足度について e. 差し支えなければ、業者から受けたサービスについて具体的にご記入下さい。（添削方法、業務の質、業者名等）

P. 上記Iの「今までに、英語論文作成などにあたって他者に添削を依頼したことがありますか」の質問について、「ある」、「ない」いずれを選んだ方にもお尋ねします。添削依頼について考えていることがあれば自由にご記入ください。

#### 《英語支援ツール等について》

Q. 近年、コンピュータによる英語支援ツール（語法データベース、コーパス、論文作成支援ソフト、ワープロの文法文体チェッカー機能等\*）が身近になってきました。このようなツールのいずれかを使ったことがありますか（スペルチェック機能は除く）。

R. これまで使ってみて便利だと思った英語支援ツールや、このようなものがあったら良いと思うツール等について、自由にご記入ください。

S. 日本国内で、英語ライティング添削等の相談に応じるセンター等を学内に設置している大学が複数存在します。これらは主に、学生のレポート作成支援を目的としており、かならずしも研究者向けの論文作成、口頭発表、研究者交流のような学術研究目的の英語支援設備ではありません。このような設備あるいはプログラム（ワークショップ、セ



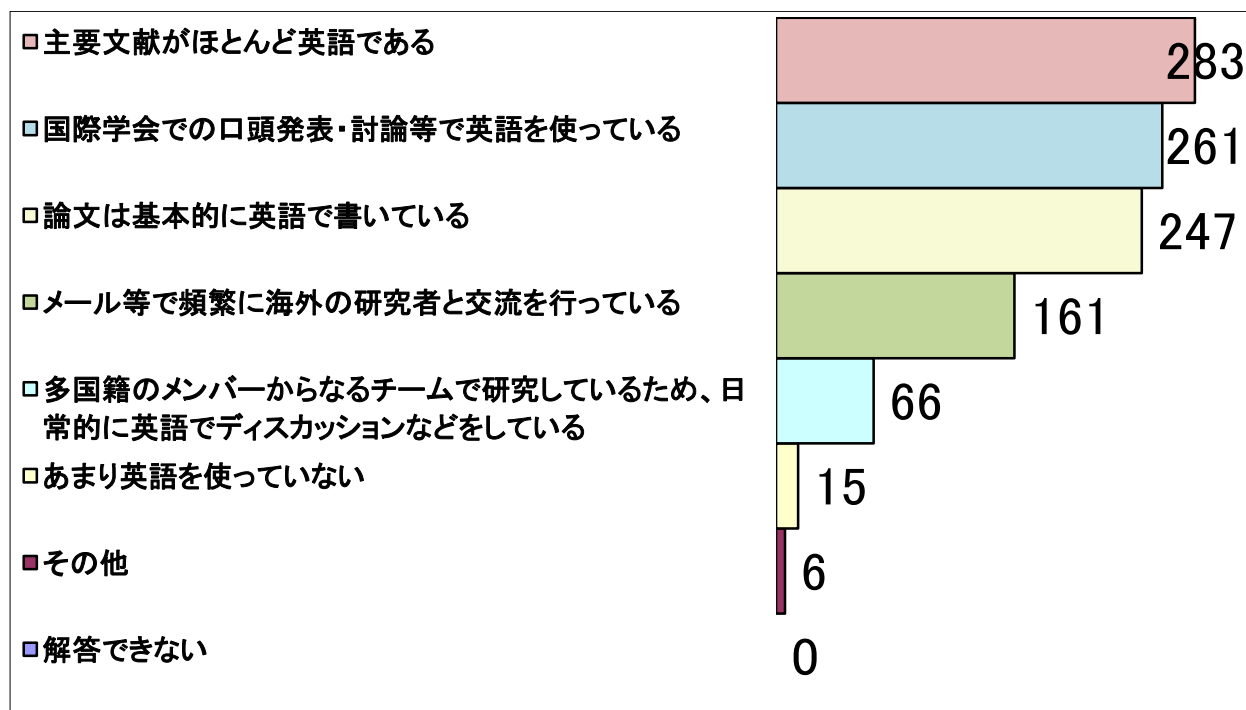
ミナー等) について, ご意見等ございましたら自由にご記入ください。

T. 本調査プロジェクトでは, ワークショップ, セミナー等の企画を検討しています。ご希望の内容を選択してください。

U. 研究者の立場から, 英語についてのご見解, ご感想, 体験談等がございましたらご記入ください。

## アンケート調査の分析

A. あなた自身の研究環境・研究活動において英語はどのように使用されていますか。

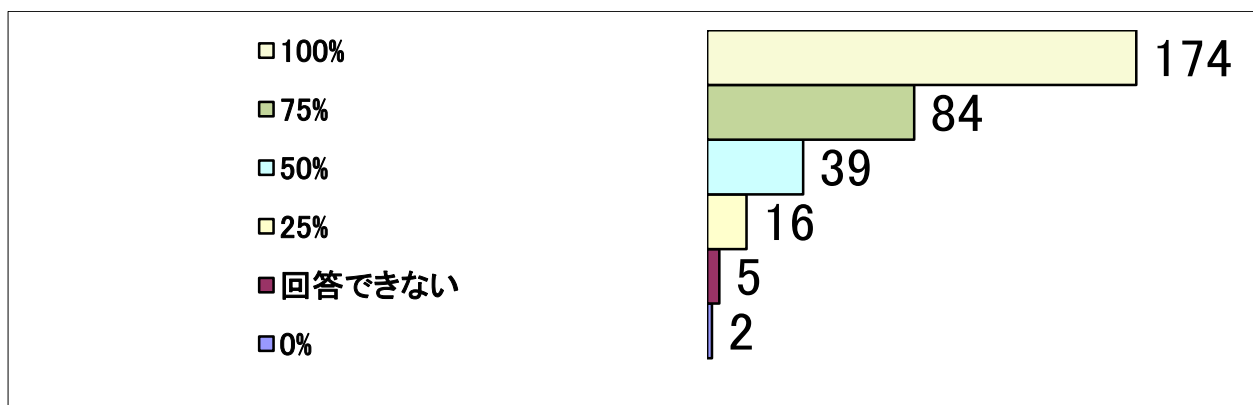


回答の多いものから、「主要文献がほとんど英語である」、「国際学会での口頭発表・討論等で英語を使っている」、「論文は基本的に英語で書いている」、「メール等で頻繁に海外の研究者と交流を行なっている」など、様々な使用状況で英語が用いられていることが分かった。320名の回答者のうち、「論文は基本的に英語で書いている」を選んだ回答者数247名はきわめて大きな数字であり、アンケート用紙を送付した総数1227名に照らしても大きな割合である。下記Bの設問への回答で、そもそも日本語で書いた論文は研究成果と見なされない、英語で書くことが常識になっている、等の記述とも関連づけて考えることができる。

次のような記述回答は、日常的な英語使用の状況をうかがわせて興味深い。

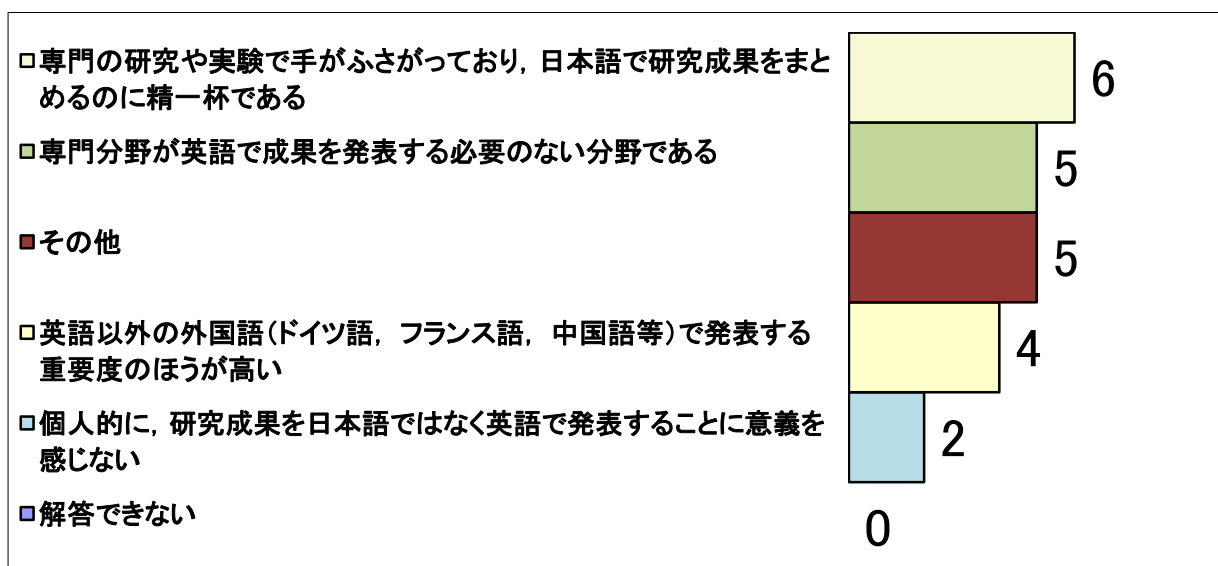
- 「研究室学生の約半分が留学生であり、研究指導を英語で行っている。海外インターン研修制度があり、現地との交渉で英語でやりとりを行っている。」
- 「場合によりけりです。日本の研究では日本語を、海外に関する研究では英語を使用しています。文献検索では、日本語・英語両方を使用します。(読む、書く論文の約半数が英語)」
- 「国際コース(グローバル)の学生を受け入れており、授業、教員ミーティング等でも英語を使用しています。(主要文献が英語であることが多い。海外の研究者と交流を行うことがある。)」

B. 研究成果を英語で論文にまとめ発表することは、あなたにとってどれほど重要ですか。重要度を下の選択肢から1つ選んでください。



100%～75%の水準で「重要度が高い」という回答が合わせて260名ほどであり、高い割合を示している。「アンケート調査の概要」で触れたことに関連して、そもそもこのような英語に関するアンケート調査に回答するのは英語の重要度が高いと感じているからこそである、という前提も読み取ることができるだろう。したがって送付総数を分母に置いた場合、調査に協力していただけなかった多くの方々は「重要度が低い」と考えている可能性もある。重要度とは別に関心度という要素も絡んでくるので、これだけでは結論が出せない点にこの種のアンケート調査の難しさがある。

C. 上記Bで「1(0%)」または「2(25%)」を選んだ方にお尋ねします。その理由は何ですか。次の中から選んで下さい。

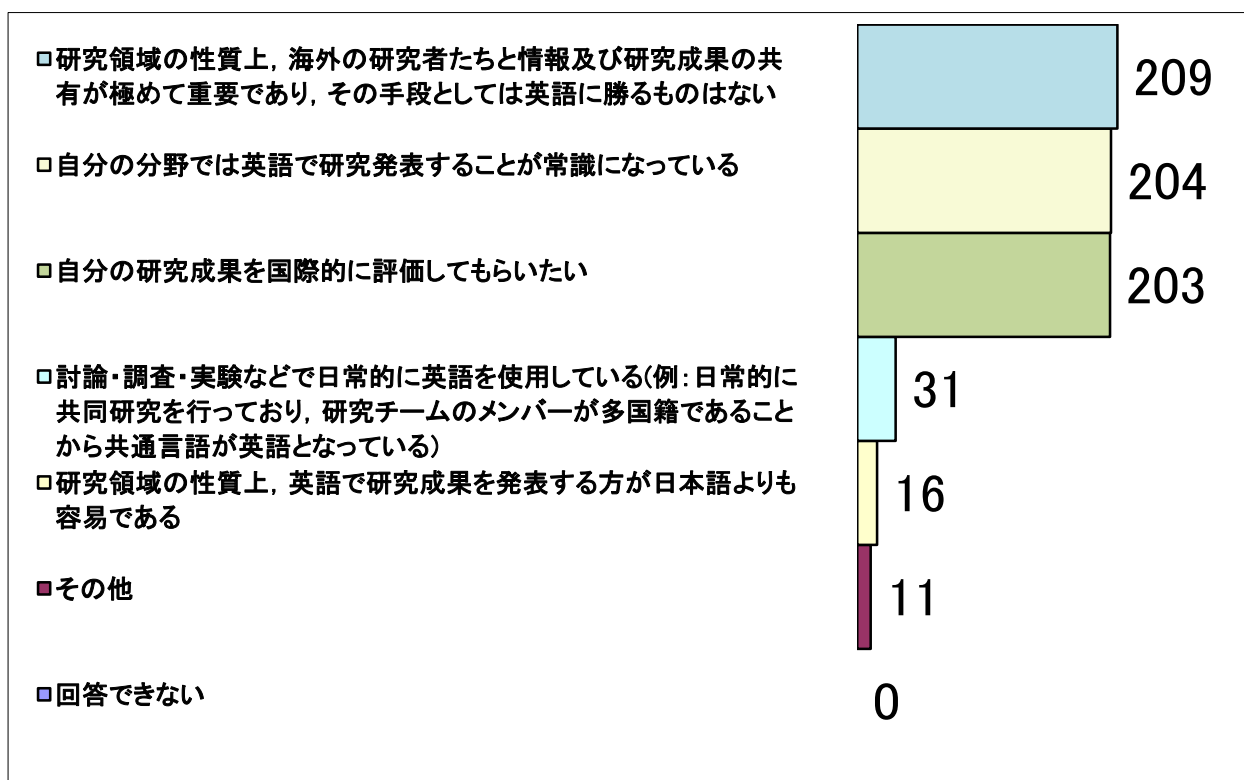


英語で発表する必要がない、あるいは英語以外の言語が重要な発表手段である、という回答は当然、予想されていた。本アンケートの趣旨に照らして注意すべきことは、日本語で書くことで精一杯、つまり英語での発表に負担がかかるという意識である。これは、最後の自由記述の欄で吐露された「学内業務に忙殺され…研究そのものがままならない状態」という印象深い回答にも繋がるものである。なお、「他の業務と比較して（重要度が低い）」また「英語で研究発表をすることに意義を感じないわけではないが…」という但し書きも見受けられ、英語での論文作成・研究発表自体の重要度が低いと感じているわけではないことも推察される。

英語が重要かどうか、という設問の仕方や、重要度をパーセンテージで測ること自体に疑問を呈する回答者も複数あった。これは、英語あるいは言語全般を研究対象としない研究者、とりわけ、自然科学分野の多くの研究者にとって英語は研究成果の発表等の手段にすぎない、という認識を窺わせる。率直に「必要に迫られているから英語を使うにすぎない」とする見解は、下記の回答に率直に表現されている。

●「英語が重要なのではない。専門誌が實際上英語を要求するから英語を使うに過ぎない。もし、スワヒリ語で書かねばならないならそうするだろう。英語は発表手段であって、目的ではない。」

D. 上記Bで「4(75%)」または「5(100%)」を選んだ方にお尋ねします。その理由は何ですか。次の中から選んで下さい。



上位三つを選んだ回答が大多数を占めている。ただ、複数回答であったので、これら三つの回答者が重複している可能性があるが、実際、集計結果の内容を見てみると、その通りであった。他の選択肢との圧倒的な差から見ても、これらが英語の重要度を評価する理由の典型だと考えられる。また、「その他」の記述では、専門分野における常識に言及した記述が目についた。例えば、

- 「英語でなければ論文と見なされない」
- 「日本語で発表しても国際的には発表していないのと同じである」
- 「投稿するジャーナルが英語誌である」

というコメントである。さらに研究者の生の声を反映するものとして、「就職や人事における評価」を理由として挙げたものもあった。

- 「（昇進・採用）人事の際、英語論文のほうが評価される」

という理由がこれに当たる。

なお、「回答できない」という5人の中に「重要度をパーセンテージで数値化することに関して疑問を感じた」等のコメントがあった。専門の研究と区分して日常の研究活動の中で英語に充てる時間・労力等の分量はどれほどか、という問いかけであればパーセンテージで測ることに違和感が無かったかもしれない。専門の研究にすべてを注ぎたいのであるが、英語での発表は必須なので、つまり英語で発表しなければ研究の成果を実体化することができない、という状況は今回の調査でもうかがえたが、いやおうなくそのような実態があるということであれば、「重要性」というよりは「必要性」「必然性」「切迫度」という観点で問いかけることが妥当であっただろう。

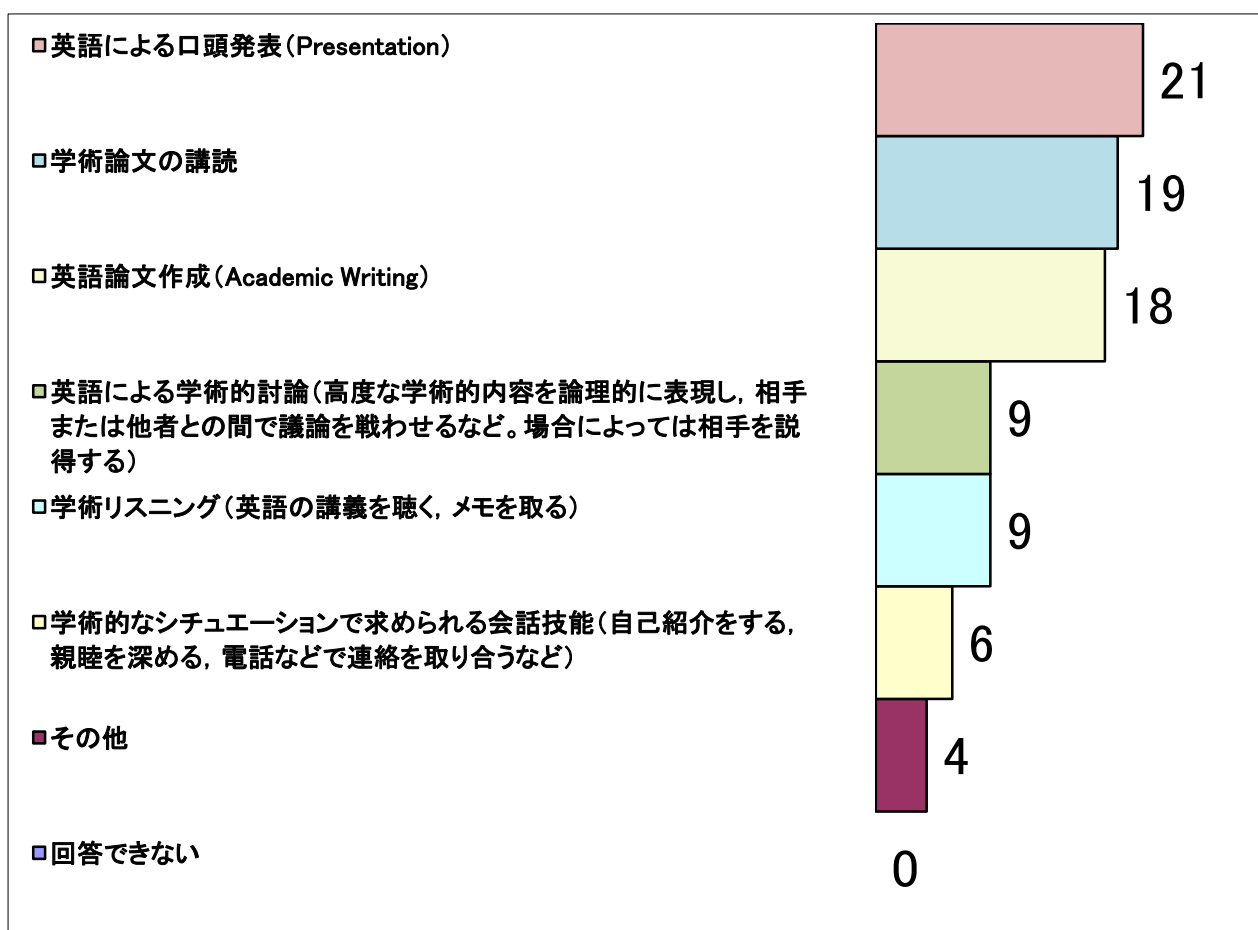
E. 大学院レベルで、英語が使える研究者を養成する教育プログラムを提供されたことがありますか。



英語が使える研究者を養成する教育プログラムを大学院レベルで提供されたことがあるか、という設問を行ったのは、上述の「背景」で示したような認識に基づくものであった。「(提供されたことが)ない」とする回答が274で圧倒的に多い。

前述の「背景」で述べたように、大学院においては教育プログラムの大部分は専門教育で占められているために、学術研究の目的に適った英語の技能訓練は乏しいであろうと推測して設問を投げかけたが、現実には乏しいことがわかった。現行のカリキュラムで科目が実際に提供されているかどうかを明らかにするためには、今後、全国の大学への調査を行う必要がある。

F. 上記Eで「ある」を選んだ人にお尋ねします。それはどのような内容でしたか。



「ある」という回答は46であったが、それがどのような内容だったかという質問に対しては、回答の多いものから、口頭発表に関するものであったり、学術論文の講読、英語論文の作成、英語によるディベートなど様々な回答があった。英語論文のリーディングおよびライティングとならんで、口頭発表 (プレゼンテーション) の

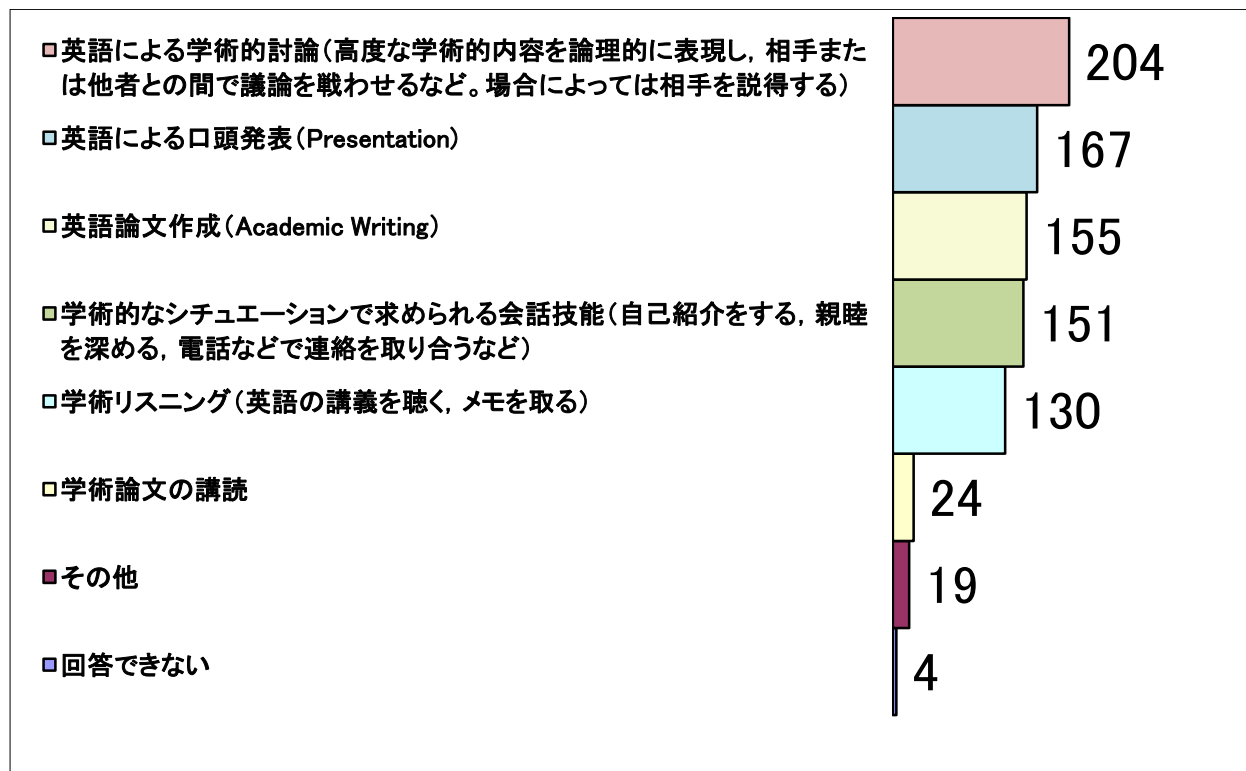
指導を受けた経験が大きいことに着目したい。学部生対象のスピーキングでは通常、一般的な会話を想定しているのに対して、大学院では口頭による研究成果の発表という特定の目的が掲げられるのは理解できる。

記述の中には、正規の教育課程に配置されている科目の履修ではなく、研究室内の事業の一環で教育プログラムに相当する活動を行ったことや、海外の先生の特別講義を受けたことが上げられていた。やはり正規カリキュラム以外のところで提供される講習等にゆだねられている面が見える。

着目すべきこととして、海外でのPh. Dの取得をあげている回答もあった。海外における学位取得あるいは海外留学が、研究者のための英語研修の機会としても機能することを示唆している。

さらに重要な指摘は、研究室内の活動で教育プログラムに相当する活動を受けられたという趣旨のコメントにみられる。講義や演習など正規教育課程を通しての英語技能修得ではなく、研究室に所属することで日常的に他の学生や教員集団とともに研究活動に取り組みながら英語のリーディング、ライティング、プレゼンテーション等の技能を習得していくという「活動参加型」の学習の可能性が示唆されている。この方向は、他の設問に対する記述回答にも見出すことができる。

G. 上記Eで「ある」、「ない」いずれを選んだ方もお答え下さい。あなた自身が今教育または訓練を必要としているとするならば、次のどのような内容ですか。





学術的討論に関する回答が意外に多く、次にプレゼンテーションが続いていることと併せて、学術目的での発話技能が求められていることは注目に値する。学術論文の講読が24名ときわめて少ないことから、リーディングに関する教育が求められていない—というよりも、すでに十分習得できているので必要ないということが推察される。興味深いこととして、ソーシャライジングに関わる技能を求める声も見られた(5名)。ソーシャライジングというのは、正規の学術的場面以外での研究者間交流を意味する。懇親会など親交を深める場面でのコミュニケーションに関する技能が求められる。記述回答では次のような状況が具体的に指摘されていた。

- 「パーティーなどでの英会話」
- 「学術的というよりひだや含みのある英会話」
- 「雑談」
- 「スラングやユーモアのある文章」
- 「クリスマスカード」

研究を抜きにした純粋な人間的交流を深める機会もあり得るであろうが、あくまで研究者同士の親交である以上、談話展開や言語表現には一定の特徴が想定される。お堅い学術的議論から場所を親睦会・パーティーなどに移して、和やかな雰囲気の中で会話を楽しむことにも、それなりの技能が必要になってくるはずである。英語で話すということに加えて、異なる文化を背景に持つ知識人との高度なしかもリラックスした会話など、学校で教えているわけもなく、今後、その重要性はどのようなものか、何か訓練のプログラムはありうるのか等について、課題化してもよいと思われる。とりわけ「研究者向け」というプログラムの設定は、難しそうであるが同時に興味をそえられる。

この方面の技能が切実であることは、他の設問の記述回答で感じ取ることができる。ソーシャライジングは英語の会話技能とともに人間関係の構築力のようなものが求められるため、この方面の技能開発プログラムを考える場合には、特別な内容を検討する必要がある。これは大きな課題である。選択肢の中に含まれていた「学術的なシチュエーションで求められる会話技能」には151名の回答があったが、ソーシャライジングの技能教育とあわせて、研究者のための英語を考えるための参考になるであろう。

また、特別に教育を施す必要は無い、という意味合いの回答もあり、注目すべき意見としてここに記録しておきたい。(すでに自分は習得できているので特に教育を受ける必要がない、というタイプの回答とは異なる。) 具体的には次の記述回答である。

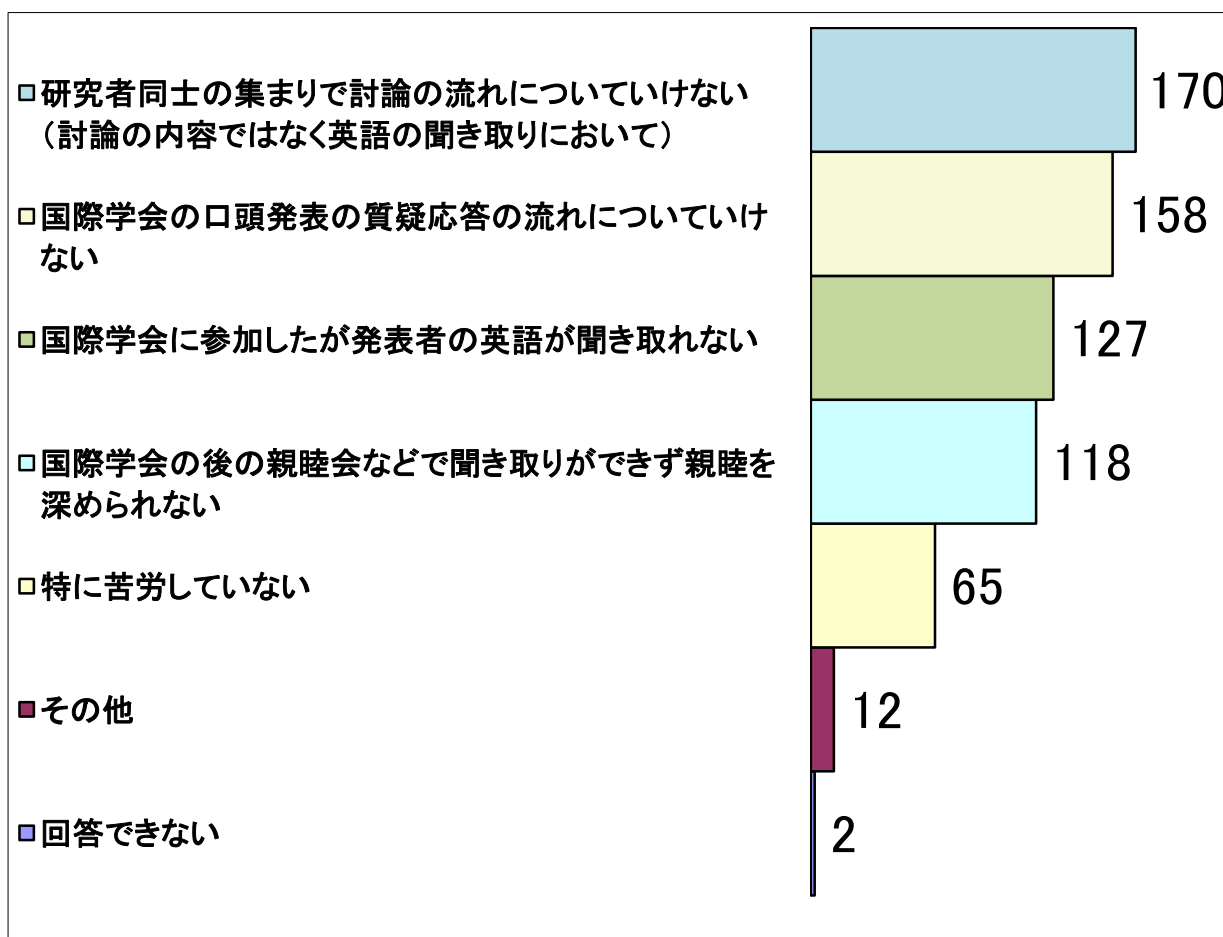
- 「学会や論文作成などの本番が一番の機会なので、研究をしたら自然と英語力もつくと思う」

英語は現実の場面に直面しながら自然に身につくものである、という認識は、他の設問に対する記述回答にも散見される。なるほど、研究活動の中で、英語に係る現実の困難に直面した場合、それから逃げることなくまっとうにそれに取り組めば、自然に技能は身につくものである、という見解には説得力がある。本質的に個々人の中で起

こっている現象面に着目すればその通りであろう。しかし、「自然に身につく」という部分を外から見た場合、個々人が外へ向かって英語に関する何らかの知識を求めていることは確かであり、その部分に、研究者支援を提供する余地があると考えられる。この点については、アンケートの分析から外れるので詳述できないが、才能ある研究者で、研究成果の発表を活発に行っており、自律的にうまくいっているように見えても、英語に関する専門的な知識を求めてくる事例は現実には起きている。

なお、どのような教育プログラムを望むかという設問に対する回答は、現在どのような側面で苦労しているか、という問題意識から来るものなので次の設問Hと照らし合わせて考察することが重要である。

Ha. 英語で苦労した経験、あるいは現在苦労していることについて、お尋ねします。学術目的でのリスニングの観点からご回答ください。



学術目的でのリスニング、リーディング、スピーキング、ライティング、ソーシャライジング、文法的側面の観点から、英語で苦労した経験、あるいは現在苦労していることについて尋ねた。まず、リスニングから問いかけた。

「討論の流れについていけない」「国際学会の口頭発表の質疑応答の流れについていけない」「発表者の英語が聞き取れない」など、様々なレベルで苦労があることが分かった。「その他」の記述からは多様な場面での切実な声を聞き取ることができる。

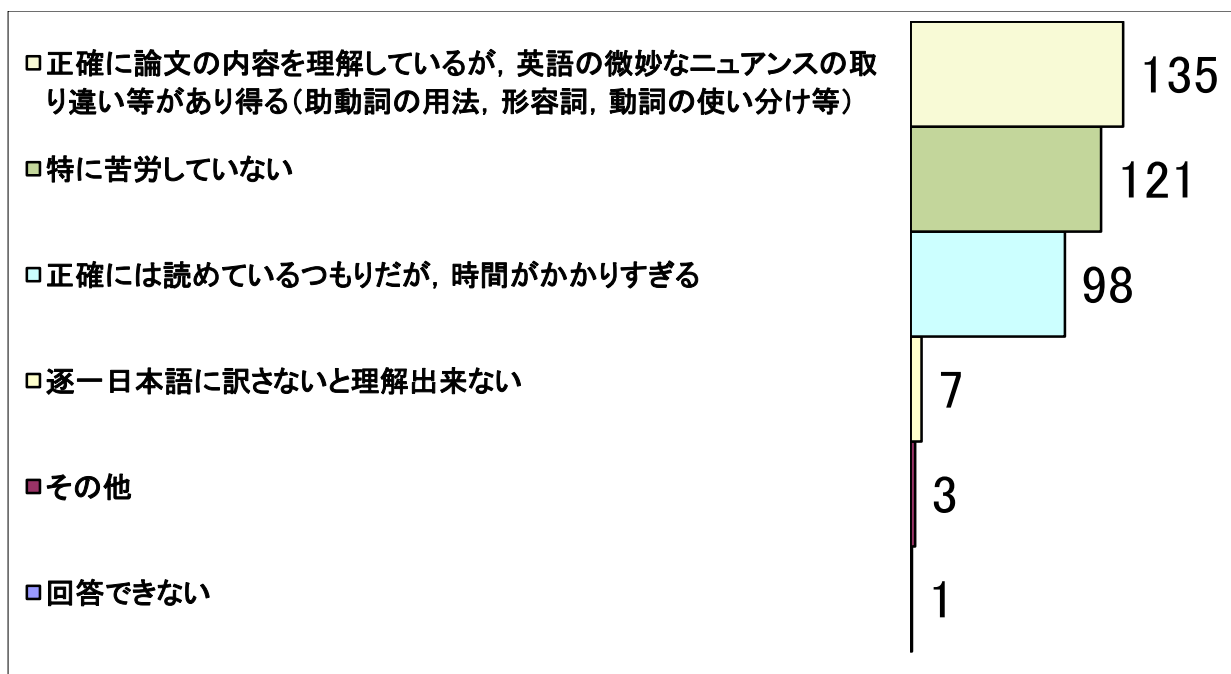
- 「ネイティブの英語の聞き取りが難しい」
- 「非ネイティブの英語が聞き取れない」
- 「専門外の話題になると難しく感じる」
- 「語彙が不足している一般的テーマの聞き取りが困難」

また

- 「ジョークが理解出来れば、もっと親睦が深められるのに」

という嘆息も聞かれた。これには技能としてのリスニングだけでなくユーモアの感覚や文化的知識の問題も絡んでくる。リスニングは、スピーキングやソーシャライジングとも関わるので、後であわせて考えてみたい。

Hb. 英語で苦労した経験、あるいは現在苦労していることについて、お尋ねします。学術目的でのリーディングの観点からご回答ください。

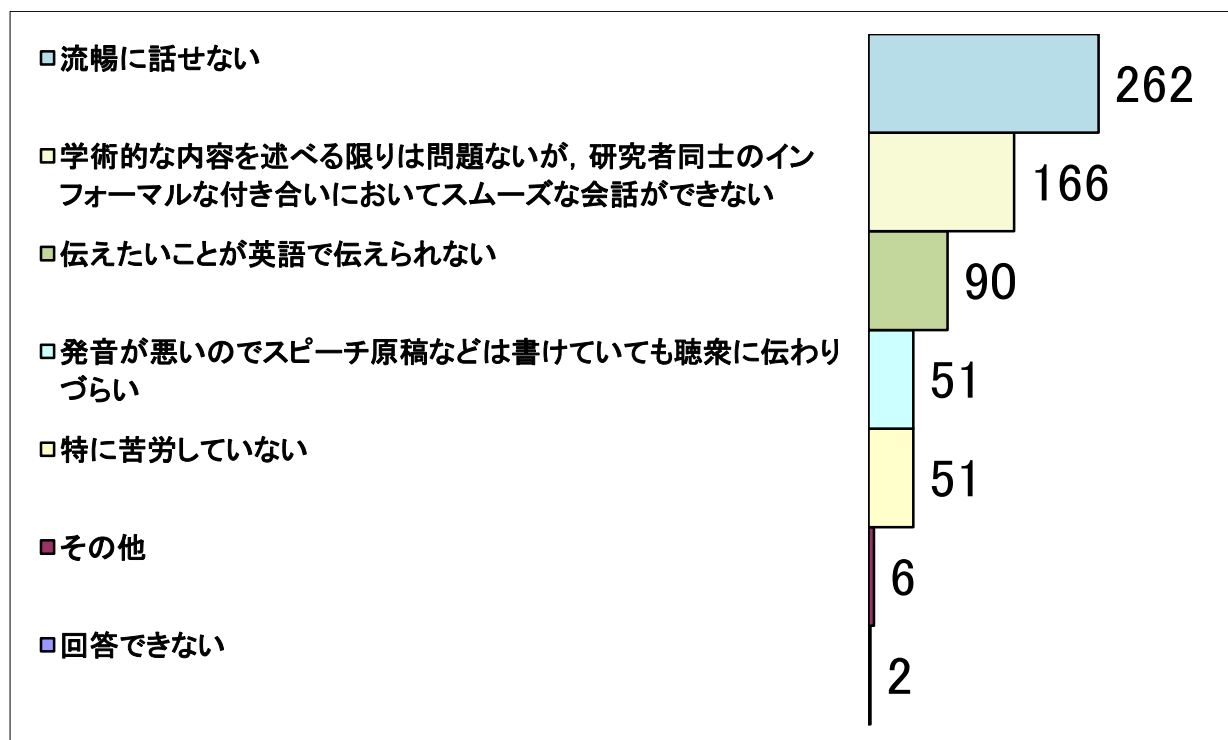


海外から入ってくる最新情報を満載した学術論文を読み解くことは最先端の研究者たちが日夜、行っていることであるはずなので、アンケートの設問作成の段階で、初歩的な質問は設定しないこととした。微妙なニュアンスの取り違いの可能性を中

心におおざっぱな投げかけをした。伝統的に大学・大学院の語学教育が講読を重要視してきたことを反映して、読む・聞く・書く・話すの4つの技能のうち、もっとも高い技能の習得を達成しているのがリーディングである、ということが言えようし、実際、アンケートでは、「苦勞していない」という回答が121あり、多数であった。他の側面に比べてこの回答が多かった。ただ、一口に「読む」と言っても、技能の評価は、読みの深さがどれほど求められるのかに左右される。基本的には数値や数式を骨格とした事実の把握だけで足りるのか、緻密な論述の細部を読み込む必要があるのか、微妙な含意や暗示、言い回しの妙まで感じ取ることが求められるのか。「時間がかかりすぎる」という回答が意外に多かったのは、学術的な厳密さを通して高度で精緻な内容を読み解く作業が行われている実態を反映しているとも考えられる。精読が最優先であれば時間がかかることは避けられない。正確な内容理解をおろそかにしてまで速読を目指すということは研究者としてあり得ないであろう。ただ、学校教育では速読の技術訓練自体あまり行われていないため、速読の習熟度が低いまま研究者になってしまった、という事情も考えられる。

またリーディングに投入される時間と労力は研究分野によって異なるはずである。具体的には、一方に数学、機械工学、物理等があり、他方で文学、哲学等があるだろう。また同分野においてもアプローチによって大きくことなるだろう。もし仮に学術論文の内容が同系統のデータ表示や類似するパターンの説明だけで成り立っているのならば、リーディングに関しては多くのものは求められないわけである。したがって、当該分野の文献講読に関する限り英語を巡る問題は少ないかもしれない。しかしこのことは英語のリーディング全般の問題から免れていることを意味するわけではなく、むしろ限られた学術活動の井戸の中で蛙になる危険性もある。複合領域のプロジェクトに携わった場合他分野の文献を読むことができるかどうか、という課題はもちろん、英字新聞の記事は読めるか、あるいは、好きな作家の小説を原文で読めるかなど、研究者交流の中で求められる課題がある（先に述べたように、研究者交流における談話展開は、リスニングやスピーキングとは別に、「読む」経験からくる多様で高度な言語技法が求められることがある。）さらに、国際的な組織の運営に関わる規約や事務的に重要な文書を読むことができるか等、様々な様式や文体を踏まえての英文読解力も求められるはずである。

He. 英語で苦労した経験，あるいは現在苦労していることについて，お尋ねします。学術目的でのスピーキングの観点からご回答ください。

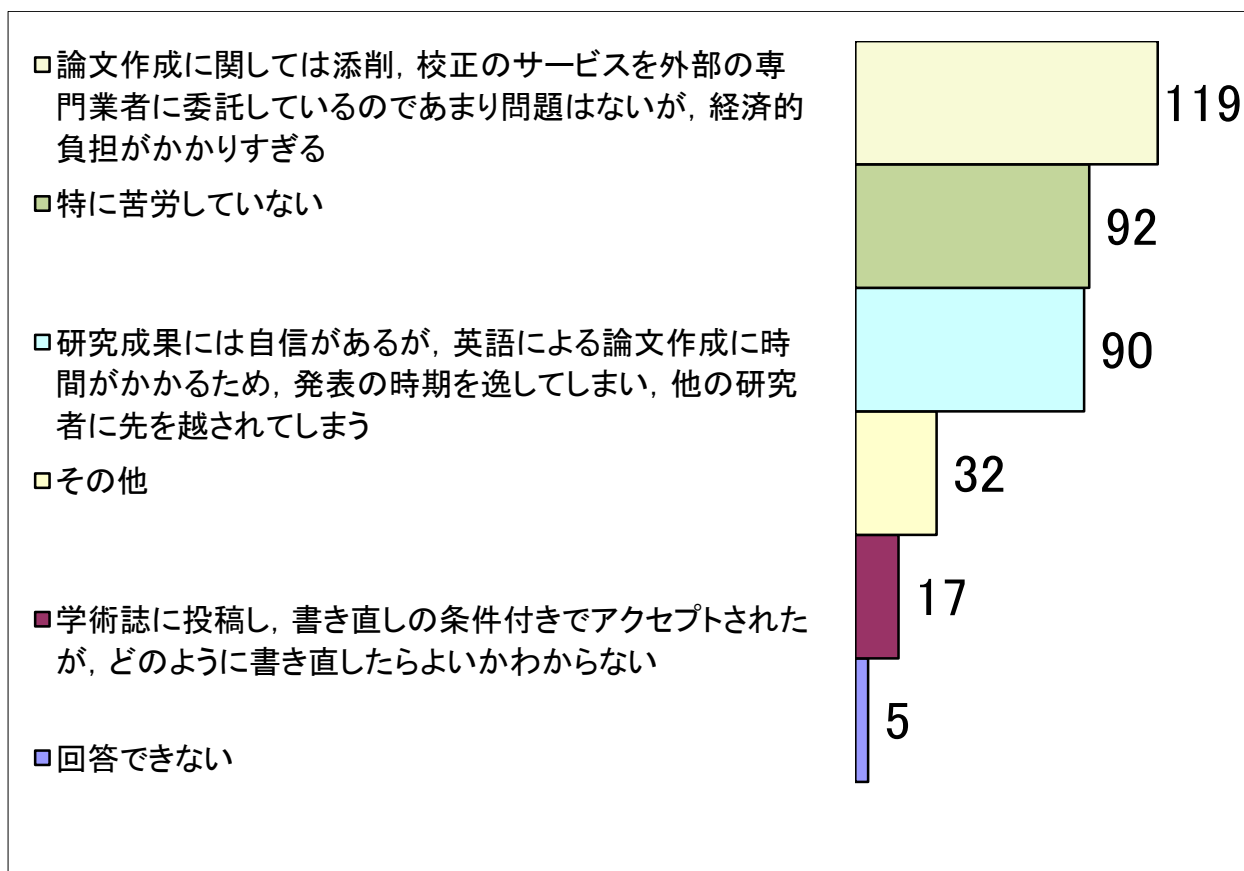


スピーキングに関しては「流暢に話せない」とする回答が262名で最も多かった。次に多かったのは「学術的な内容を述べる限りは問題ないが，研究者同士のインフォーマルな付き合いにおいてスムーズな会話ができない」というソーシャライジングにも関わる回答であった。これは「その他」の記述にもあり，「インフォーマルな会話」が難しいという声は注目すべきである。他の記述回答は次の通りである。

- 「知っているはずの単語がすぐに出てこない」
- 「すぐに言いたいことが出てこない」
- 「実際には時間をかければ通じるので，そんなに困ることはない」
- 「かなり準備すれば，問題なく伝えることができるのだが負担が大きい」

以上は，設問Heのソーシャライジングに関する回答で，インフォーマルな語法に関するコメントが見られたこと，また，ジョーク等の理解が重要だという指摘があったことと併せて見ることができる。

Hd. 英語で苦勞した経験，あるいは現在苦勞していることについて，お尋ねします。学術目的でのライティングの観点からご回答ください。



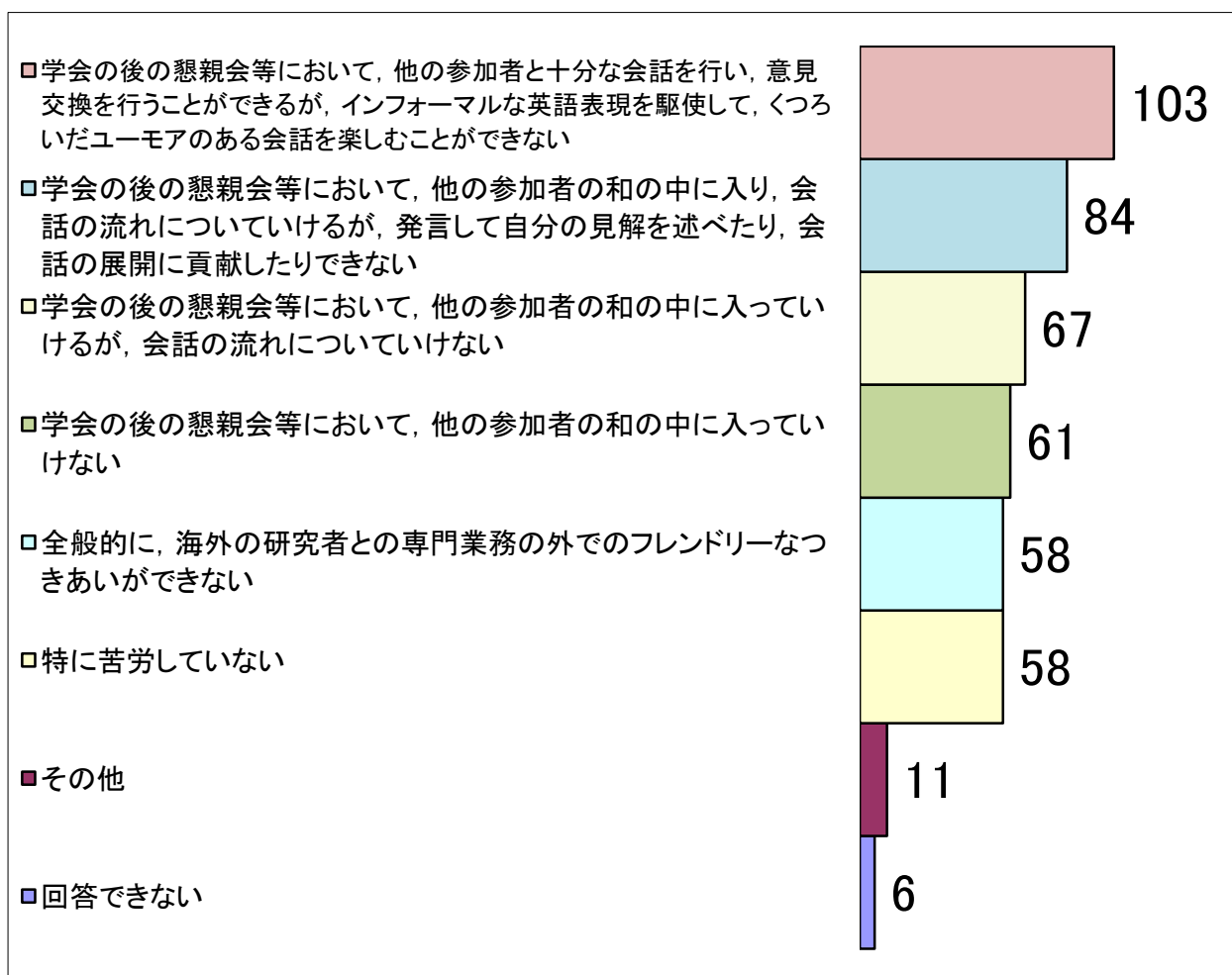
「特に苦勞していない」という回答が92名で，順位で云えば2番目であることが注目点である。上位の選択肢つまり「論文作成に関しては添削，校正のサービスを外部の専門業者に委託しているのであまり問題はないが，経済的負担がかかりすぎる」という回答が最も多かった。この設問には，「専門業者に委託しているので問題ない」という積極的な内容と，「経済的負担がかかりすぎる」という消極的な内容が混在しているので，この二つの問いかけを切り分けた方がよかったであろう。「特に苦勞していない」という回答の中にも，英語論文作成の技能を十分に習得しているので特に苦勞していない，という意味合いと，自分自身の技能は別にして専門業者へ外注しているなのでその分負担がない(したがって苦勞していない)，という意味合いの両方が混在していることが考えられる。3番目に多かった「研究成果には自信があるが，英語による論文作成に時間がかかるため，発表の時期を逸してしまい，他の研究者に先を越されてしまう」という回答からは，明らかに本人が生身でライティングに取り組んでいる様子がうかがえる。「その他」の記述回答には以下のようなものがあるが，ライティングの実務に係る苦勞はもちろん，時間的・経済的な面での負担を訴える声も聞かれ，その声はかなり切実な響きを帯びている。

- 「英文が悪く、そのため査読されないことがある。(そのときになって校正サービスに出す。)」
- 「大いに苦勞しているが、日本語でも同様なので」
- 「自分の英語がどこまで自然な感じになっているかが分からず、少し不安がある。」
- 「より適切・短い表現を見つけるのに時間がかかる。＜研究成果には自信があるが、…＞ほどではないが、時間・労力がかかる。」
- 「校正サービスを使用しないと細かい文法の誤りに気付かないことがままあります。」
- 「微妙なニュアンスの表現ができていないかもしれない(自分で思っているニュアンスと相手がうけとるニュアンスとのズレ、たとえば助動詞の用法などで)」
- 「英語の微妙なニュアンスを調べるのに時間がかかる。最近はGoogleの検索サービスにより高速に調べることができるようになった。」
- 「英語の文章の出来が悪くて、投稿した論部がEditorによってRejectされてしまうことを何回か経験したことがある。」
- 「表現がどうしても単調になりすぎる」
- 「Nature, Science誌に載せても恥ずかしくないような、分り易く、メリハリのある表現にするのに苦勞している」。
- 「英文の品質をどうすれば改善できるのかわからない」
- 「論文作成に時間がかかるため、他に先を越されるとまでは言わないが、研究時間が減ることになる。」
- 「詳細の議論をしたい時に苦勞する」
- 「文法上のミスを完全になくすことができない。表現のバリエーションが少ないため魅力的な文章にならない。冠詞やニュアンスなどで迷うことが多い。」
- 「書きたい内容を正しく伝えられているはずであるが、微妙な使い回しなどに不安が残る。例えばSo→Therefore, namely→that isなど添削で直されたことがあるので」
- 「冠詞の使い方など、分からないことがある。ボキャブラリー、言い回しが少ないのでコンパクトでわかりやすい文章を書くのが難しい」
- 「とにかく苦勞している」
- 「冠詞の使用法など細かい英語の用法について校正サービスの結果を見て学んでいるが、なかなか上達しない。」
- 「苦勞はしているが、それなりに定期的に国際ジャーナルに投稿している。国際誌から何度か総説執筆の依頼を受けた。」
- 「自分たちで書いている。でも苦勞はしている。Acceptはされる。」
- 「非常に重要と思う論文の場合には外部の専門業者にチェックを依頼する。細かい部分前置詞等がマスターしきれていない為、サービスを利用しなくては、投稿できない」
- 「論文作成に必要なレベルの英語はかけるが、最適な表現ができていない自信がない」
- 「英米のスタイルの違いによる一貫性獲得がむずかしい。」
- 「苦勞はしますが、書くことにそこまで抵抗はありません。またこれまでとくに

校正サービスを使わずに英語論文としてAcceptされてきています。サービスを使ったこともあります。」

- 「時間がかかる。」
- 「時間がかかるので他の仕事の時間が削られる」
- 「執筆に時間がかかる。細かなニュアンスを伝えられない。」
- 「英語による論文作成に時間がかかるため、研究やその他の業務の時間が少なくなる。」
- 「添削サービスの負担等はあるが、現実的な不利益を被ってはいない。論文作成に時間がかかるため、まとまった時間が取れないと、なかなか論文が完成しない。」

He. 英語で苦労した経験、あるいは現在苦労していることについて、お尋ねします。学術目的でのソーシャライジングの観点からご回答ください。



ソーシャライジングに関しては、研究発表や討論のような正規の学術活動ではなく、人間的要素を含んだ研究者同士の交流を想定し、主に国際学会の後の懇親会について問い



かけた。一定の学術目的を保ち、学術研究をめぐる人間関係を基盤としながらも、談話内容や言語表現においておもむきが異なる場面にどのように対応するかが課題となる。

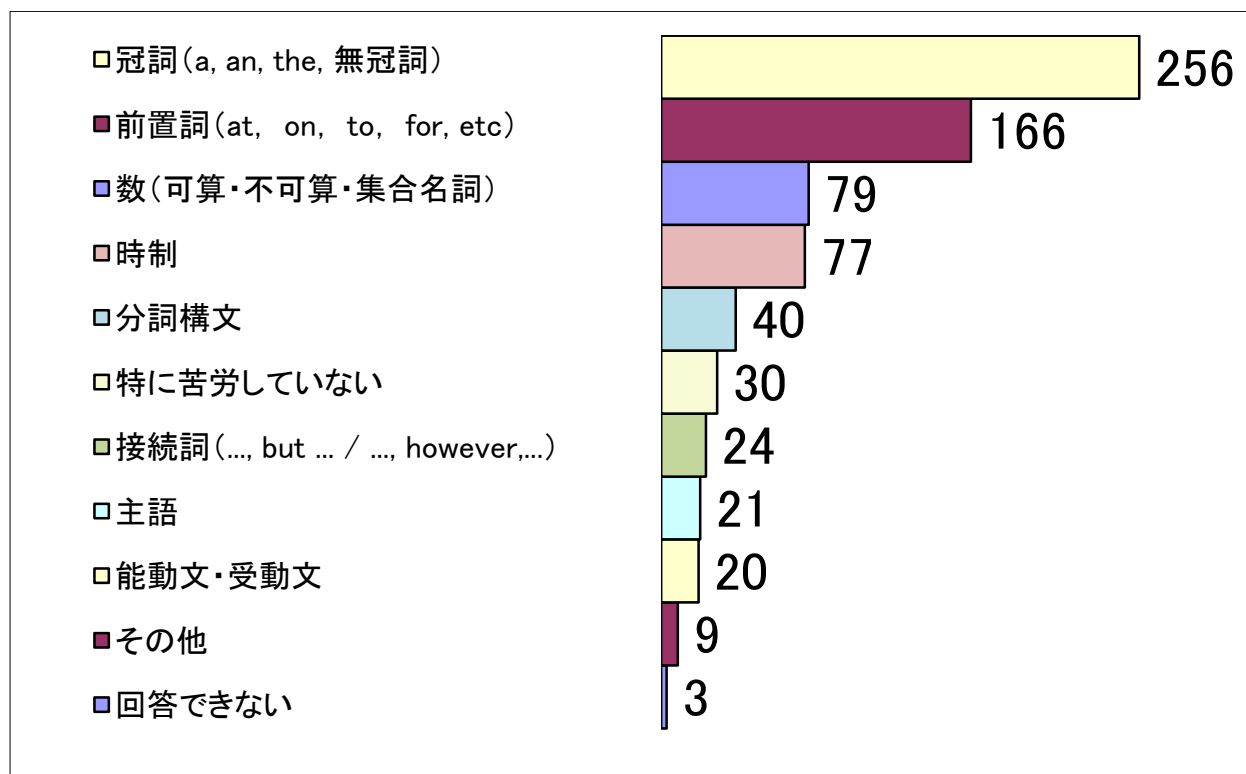
そもそも研究者にとってソーシャライジングが重要な課題になりうるかどうか、という問題は議論が分かれるところであろう。交流ができないのは「性格の問題」もある、という記述回答もあったし、他の設問に対する回答には次のような指摘もあった：「語学の能力は研究者としての素質との連関がない場合もある。英語だけ得意なものが、国内の学術成果について質の高くない発信をされることも、英語ができない有能な研究者が肩身の狭い思いをすることも望ましくない」。これは重要な指摘である。しかし、正規の学術研究そのものと、研究者交流活動を切り分けて、後者の価値をどのように評価するか、という問題を検討する必要があるだろう。評価される「内容」が言語と関わりなくともその「表現」は言語によって行われる。（もちろん、数学や理論物理学のような一部の分野では、言語表現を駆使する困難さが、一定の手続きに基づいた数値と記号の使用によって緩和される。）音楽コンクールやオリンピックのように、評価される「内容」とその「表現」が言語と関わりなく、発表者が個人あるいは国を背景にした集団で閉じている場合とは異なり、学術研究は、国際的場面での意見交換、国際的な連携・協力というものが活動の重要な側面になり得る。

ここでは、以上のことを示唆しておくにとどめ、以下、回答を見ていくことにする。そもそも輪の中に入っていけない、という61名の回答からうかがえるのは、国際的な場面における日本人研究者の孤立した様子である。そのような事態によって国際的な研究活動に何らかの影響が出ているのかどうかは、今後、検証の余地がありそうである。また、このような孤立が、ある程度英語の運用能力に係ることは言えるにしても、人間的交流に積極的に係るための別種の能力が関与しているのかどうかは不明である。

上位二つを占めたのは、会話の中に入っていくことは出来るが、「くつろいだ」「ユーモア」のある会話ができない、あるいは積極的に発言したり会話の展開に大きく関与したりすることが出来ない、という状況をうかがわせる回答であり、合計して187名、つまり全体の約3割であった。この方面に関して、何らかの教育・研修が求められるであろう。

インフォーマルな英語表現に関しての記述回答では、くだけた表現と丁寧な表現（敬語）の線引きが難しいといった意見のように言語様式や言語使用状況等に関する指摘、また、スラングの理解に困難を覚える、といった感想のように、インフォーマルな語法に関するコメントもみられた。また、ジョーク等の理解が重要だという指摘もあり（他の設問への回答でも見られた）、言語それ自体の問題と言うよりも、文化的・教養的側面の理解が必要であることが示された。

Hf. 英語で苦労した経験，あるいは現在苦労していることについて，お尋ねします。学術目的の文法的側面の観点からご回答ください。



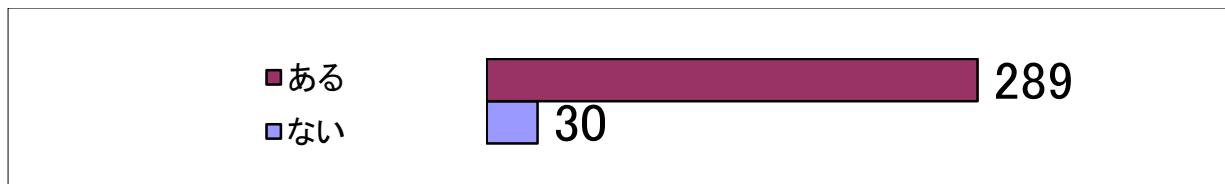
文法的側面での苦労について細かい選択肢を設定した。320名中256名が冠詞について苦労を感じると回答し，筆頭であった。次が前置詞であり，166名であった。冠詞と前置詞という二つの文法事項が，困難を覚えるものの上位に来ることは予想されたことであったが，それにしても冠詞が前置詞を大きく引き離して断然トップという結果には誰もが目を見張るだろう。実際，英語の定冠詞，不定冠詞，無冠詞の使い分けは，日本語話者にとって習得が難しいという点は一般的に指摘されることではある。ただ，今回のアンケートに寄せられた回答は，学術的に緻密な内容を英語で表現しようとする実務経験から寄せられたものあり，その意味で貴重である。なお，冠詞は名詞のとらえ方に関わるものであり，3位の「数」とも関連があるので，両者は併せてとらえてもよいだろう。記述回答で，「非ネイティブではどうしようもない」といった声が多数あり，ライティングの仕上げにおいて添削の必要性があることを示唆している。

「時制」は4位の位置を占めた。学術論文の各セクションの記述内容との関連で，使い分けが難しいという意識から出てきたものと考えられる。（各セクションの記述内容に関連する時制の問題とは，具体的には，導入，方法論，実験，検討，論証等のそれぞれの内容にどの時制を使うか，という問題。）しかし，実際のところ，時制の用法は冠詞や前置詞ほど複雑ではなく，各研究分野で一定の取りきめや習慣があるため，一定の適切な学習によって習得は容易だと考えられる。講習会等の企

画が有効であろう。

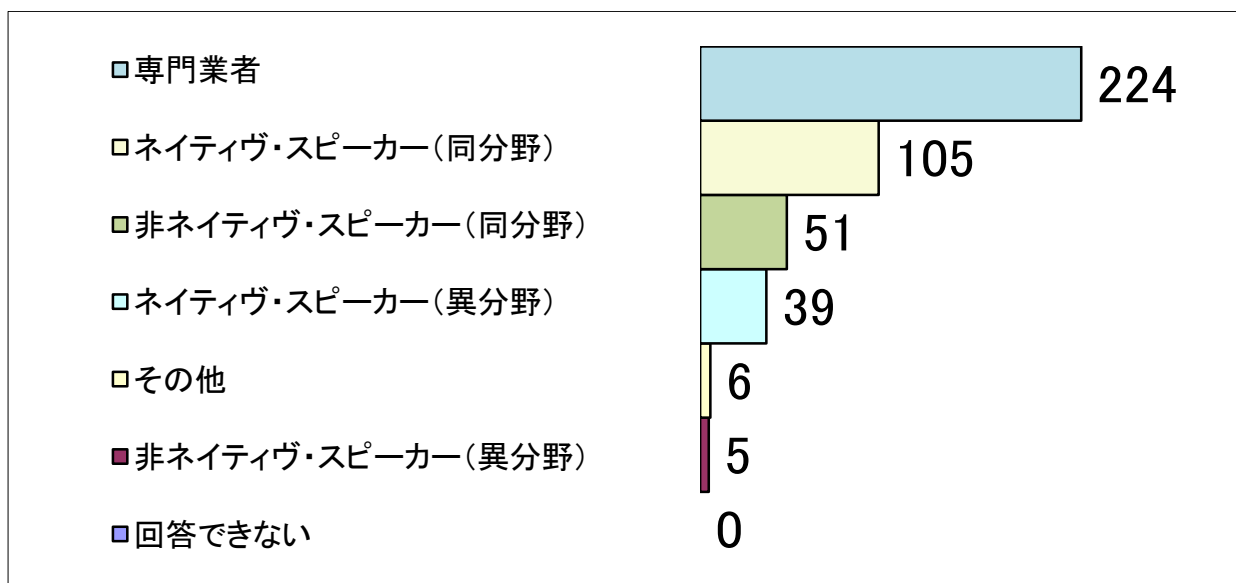
その他の事項で、法助動詞や仮定法などに言及した回答が多かった。法助動詞は蓋然性や可能性を表す表現(will, can, may, would, could, might, must, should … / likely, probably…etc)であり、学術論文でもライティング・リーディング両面で問題となりうる。今回、選択肢にはあげなかったが、困難さの度合いは上位に上がることは確かである。

I. 今までに、英語論文作成などにあたって他者に添削を依頼したことがありますか。



回答者のほとんどが添削を依頼した経験を持つ。このことは、まず英語論文作成の経験がある、ということと、さらに、論文を仕上げるにあたって全くの独力ではなく、他者の力を借りたことを意味している。次の設問Jの回答でわかるように、依頼したのは専門業者が大部分であり、経費を投じて英語ライティングの質を上げる努力をしたことがうかがえる。

J. 上記Iで「1. ある」と回答した方にお尋ねします。ライティングの添削を誰に依頼あるいは委託しましたか。



添削を依頼したのは誰であるかという問題は興味深い。英語論文の質を向上させるために誰にサポートを求めるか、という意味で研究者が置かれている状況が垣間見えるからである。また、その際、どのような形でサポートを得たかという問題には、研究者が置かれている経済的な状況も関わってくる。最も多かった回答は、「専門業者」（289名中224名）であった。所属大学の内部ではなく外部に対し、しかも経費を払って委託する、という傾向が見えてくる。なお、設問設定の趣旨が明確ではなかったためか、同分野の「ネイティブ・スピーカー」に依頼したという選択肢について、「専門業者」に対して委託した際に担当者が同分野の「ネイティブ・スピーカー」であったという意味合いで回答した方も見受けられた。この回答として想定したのは、外注ではなく例えば同じ所属機関に在籍する同分野のアメリカ人の研究者に添削を依頼する事例である。しかし、そのような態勢は、日本の大学という研究組織においてはあまり整備されていないようである。むしろ回答結果に表れているような、同分野の「非ネイティブ・スピーカー」の事例が多いものと考えられる。気になるのは異分野の「ネイティブ・スピーカー」や「非ネイティブ・スピーカー」へ添削を求める事例である。英語論文の内容に必ずしも精通していない専門外の人に、英語のネイティブ・スピーカーという理由で、添削を依頼するとすれば、それは「やみくもに」そうしている、という印象は免れがたい。この回答は39名にのぼった。非ネイティブ・スピーカーではあっても英語に詳しいという理由で依頼する場合はなおさらである。この回答は5名であったが、この数字は決して無視できない。

【注記】 もちろん添削を依頼する場合の事情は個別に異なるはずなので、実態はさらに精査する必要があるが、次のような観点を設定しておくことは重要である。

1. 添削してもらう人はどのような資格の持ち主であるか。

(1) 当該研究の内容をよく理解しているかどうか。

(2) 一般的な意味での英語の文法・語法に加え、学術英語の語法・文体等について一定の規範に基づいた判断ができるかどうか。

(3) 依頼人が添削結果に関する説明を求めてきた場合、適切な説明を行うことができるかどうか。

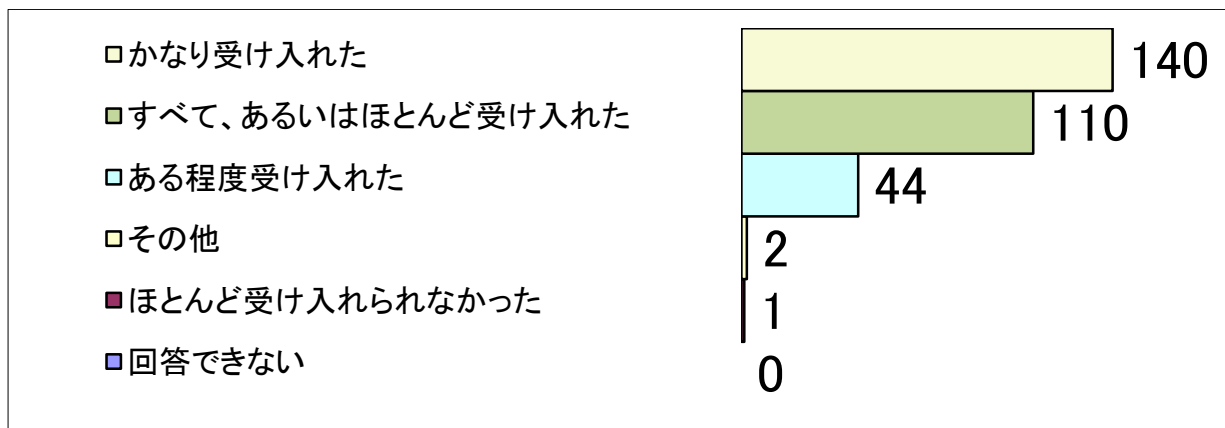
2. 何をどこまで求めるのか（自分が書いた英文の何をどのように改善してほしいのか）。

(1) 文法的な誤りを直す程度でよいのか。

(2) 文体まで踏み込んで、書き直し（rewriting）を求めるのか。

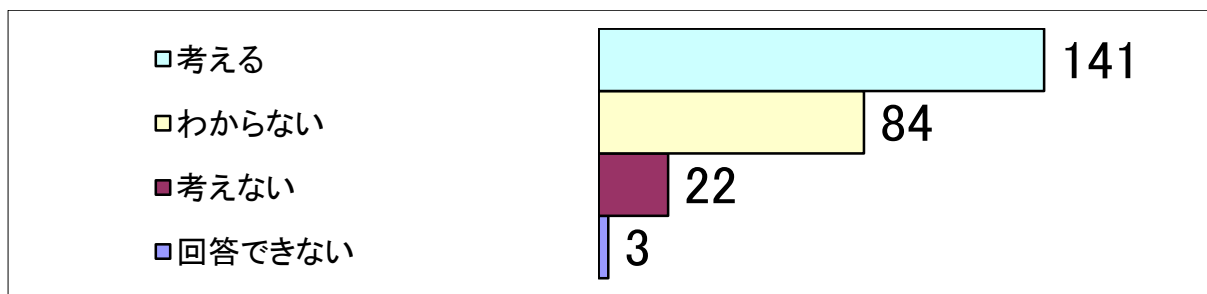
(3) 書き直し等、改善案を具体的に示してもらうのか、それとも改善すべき箇所を示唆する程度でよいのか。

K. 上記Iで「1. ある」と回答した方にお尋ねします。添削をどの程度受け入れましたか。



「受け入れた」の回答のうち、「かなり」と「すべて、あるいはほとんど」を合計してよいとすれば、回答は250名にのぼる。しかし、「かなり」と「すべて」は、切り分けて考えるべきではなかろうか。「かなり受け入れた」とするのは、受け入れなかった箇所もそれなりにあることを示唆しており、ここには依頼人の独自の判断が入っている。他方、「すべて、あるいはほとんど」では、依頼人は、添削等を依頼し、返却された添削物を無批判に受け入れた可能性が大きい。この点、実態は個別に調査しなければわからないが、例えば「ネイティブ・スピーカー」に頼んだのだからその英語に関する判断は絶対であろう、という寄りかかりがあるとすれば、かなり危険である。そもそも、英文の内容と添削箇所の真意を汲み取った上で、修正や加筆が行われているか確認するすべがなければ、双方が誤解したまま英文に手が入られることになる。添削されて返ってきた英文は必ずしも完成品とは言えない。その後の一定のやりとりにより、相互に理解を訂正・深化させながら添削作業を進めることが重要である。この問題は、添削のプロセスに関する下記0cの設問に繋がっていく。

L. 上記Kで「1. すべて、あるいはほとんど受け入れた」または「2. かなり受け入れた」と回答した方にお尋ねします。添削のおかげで学会誌等にアクセプトされるレベルに達したと考えますか。



学会誌等にアクセプトされるレベルに達したのは添削のおかげかどうか、という判断は、専門業者等に高額な料金を支払ったことに対する費用対効果を誰でも期待し、実際、ある程度確認できるはずなので、「そう考える」という回答は当然である。もちろんこの設問は、誰に依頼したかは特定していないので、知人関係に依頼した場合もあり得る。いずれにしても、添削を受けて英文の精度を高めるという重要で困難なプロセスを経てもなお、「添削のおかげで学会誌等にアクセプトされるレベルに達した」とは考えない人が22名いることは意外である。さらに気になるのは「わからない」という回答が84あることである。ここで読み取れることは、添削結果を「すべて」あるいは「ほとんど」または「かなり」受け入れたと回答した人の半数近くが、添削の成果をあまり評価していない、あるいは、不明だ、としていることである。英語論文作成のそれぞれの過程は有機的に機能し、それぞれが重要な意味を持ちながら最終仕上げへ向けて相互に関連することが理想であるが、ここでは、添削の成果の確認という最終段階がうまく機能していない状況が垣間見える。

M. 上記Jで 2, 3, 4, 5 のいずれかを回答した方にお尋ねします。  
添削を依頼した際に、謝金などのお礼をしましたか。差し支えない範囲でご回答ください。

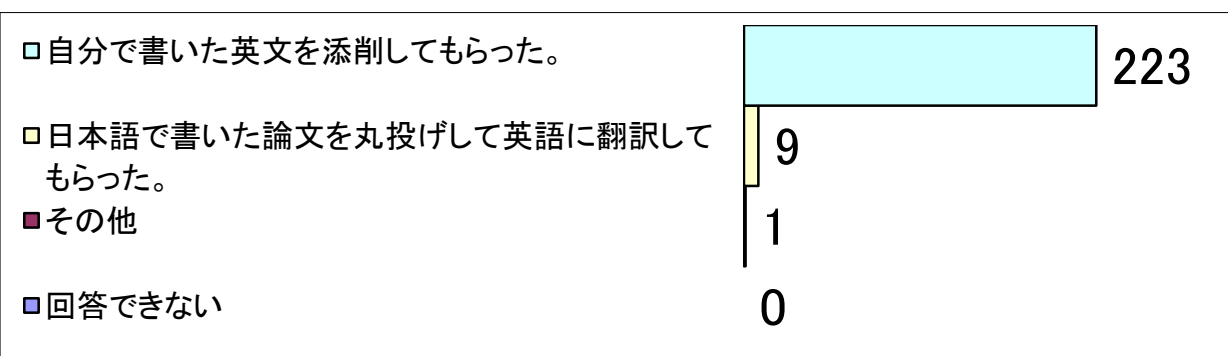
この場合の謝金は、専門業者等への委託契約等による料金とは異なり、個人的な依頼を行った場合の謝礼を意味する。この設問には記述回答を求めたので、実際によせられた回答の言い表し方は様々であったが、実質的に金銭による謝礼はしていない、とする明確な回答は70であった。営利を目的とする業者に添削を依頼する場合は切り分けて、学術的な人間関係の中で他の研究者や知人に依頼する場合を考えると、そこに金銭が介在するかどうかは重要なポイントになる。したがって、上記回答の中には、「業者に委託する場合の費用は除き」という注を含むものが少なからずあった。また、依頼した人が「共同研究者」だったので謝礼をしていない、という注釈を付けた回答も6件含まれる（本人との関係は「同僚研究者」「協力研究者」などと表記されている）。また、「共著者だったので」（3件）、「知り合いだったので」「友人だったので」「親しい同業者だったので」（各1件）、という理由が示されているものもあった。ここからは、研究者同士には金銭的利害を超えた学術的相互協力の意識があることがうかがえる。「学生の時の指導教官だったので」（2件）という理由は、当然のことであろう。「論文中に謝辞を入れてあげた」（3件）あるいは「co-authorshipをあげた」（1件）という回答にみられるような互惠関係が存在することも今回、判明した。「相手の日本語論文の添削を行った」という回答も、相互の支援関係という点で興味深い。「口頭でお礼を述べた」（2件）のみ、という回答もあったが、これは良好な人間関係が十分築かれていることを表しているのか、それとも、謝礼のための出費が難しかったためか不明である。「食事をおごった」（3件）、「マクドナルドの100円バーガー

をおごった」という回答からも、金銭による代価支払いに基づくドライな業務依頼ではなく、交友関係の範囲内で支援を得る状況が垣間見える。金銭のやり取りはかえって人間関係をぎこちなくさせることもある。他方、交友関係にどの程度寄りかかることができるかは、各自の人間関係の事情によるであろうし、人間関係に基づく支援は必ずしも安定的に提供されるわけではない。運もあるだろう。「完全にご好意で見ていただいた」という回答は、得難い状況を語ったものだとも言える。また、現実問題としては、添削を受けるための経費支出が厳しいために謝礼ができず、「交友関係に頼らざるを得ない状況」を指摘する声もある(設問Pの記述回答)。

謝礼をした、という回答は19件あったが、どのような相手にどのような形で依頼したのかが記述の中から明確に読み取れなかった。専門業者に対する支払い料金と混同している回答も少なからずあった。謝礼をしたこともあればしなかったこともある、という趣旨の回答も3件あり、人間関係や状況によって金銭の介在が左右されることがうかがえる。個人的な依頼の場合はありうることである。

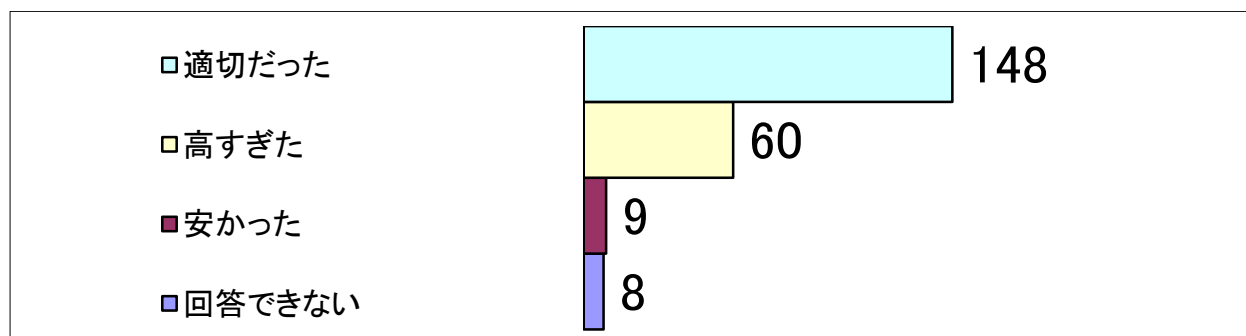
全体としては、専門業者以外に依頼する場合、謝礼をしていない、という回答が多い、ということがわかる。

N. 上記Jで「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。次のケースのいずれですか。



ここでは、自分自身で書いた英語を添削に出したのか、それとも日本語から英語への翻訳を依頼したのかの二つをざっくりと尋ねた。圧倒的に前者が多いことが分かるが、むしろ、日英の翻訳が9件あった、ということが興味深い。分野は不明である。他の設問への回答でわかったように、英語で論文を書くことが日常的であるような医学や工学等の分野とは異なり、海外への発信が活発ではない分野あるいは外国語との関係が薄い分野であろう。日本関係の分野(日本文学、日本史、日本政治史等)やアジア関係の歴史文化分野ならば、日本語原稿を翻訳業者に丸投げ、というのも不自然ではないだろう。

0a. 上記Jで「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。  
翻訳または添削サービスの料金についてどのようなことを感じましたか。



適切だったという回答が約66%であり多くを占めた。「安かった」という回答は、費用対効果の点でどのようなサービス内容だったのか興味深いところである。もちろん、「高すぎた」というのは問題であり、回答が60件あることは看過できない。他の設問の回答にうかがえるように、「悪くなって戻ってきた」等の不満が、料金設定に対する不満足となって現れたものであろう。

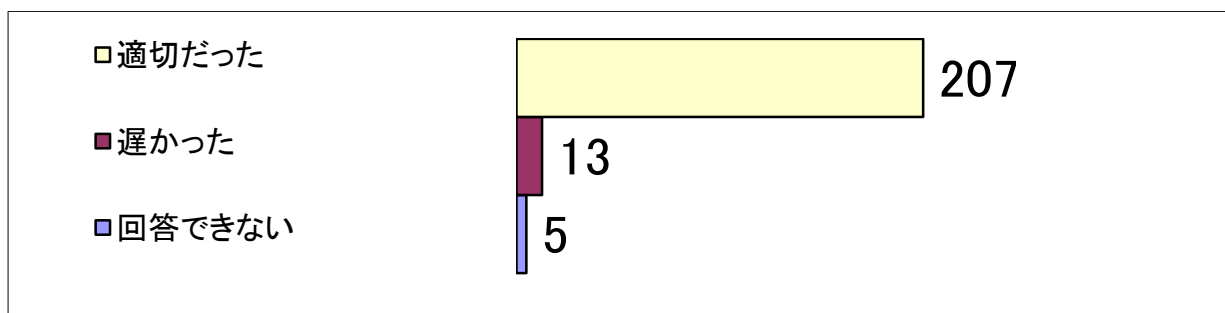
料金設定とサービスの成果を照らし合わせて、依頼者の満足度を単純に測ることは難しい。ここでは、いくつかの点を指摘するにとどめておこう。

第1に、若手研究者にとっての添削サービスの満足度は、公費扱いにするか自腹を切るか、あるいは手持ちの予算はどれほどかによって異なるであろう、という点である。そもそも専門業者に添削を依頼すること自体が高嶺の花であるような大学院博士後期課程の学生や若手研究員クラスも存在する。このアンケート設問では、高額なために一度も利用したことがない人の声を聞くことができなかった。どれほど良い成果が得られるにしても、高額で手がでない、あるいは、過度の経済的負担を持たなければならないとすれば料金に対する見方は大きく揺れるであろう。

第2に、どれほど高度な成果を期待するのか、そして高度な期待を成り立たせる英語力がどれほどあるのか、ということが料金設定への満足度に表れるであろう、という点。高度な成果を期待すればするほどそれが達成された時の満足度は高いであろうし、逆にかなわなかった時の不満は強いであろう。また、学術論文の英文添削では複雑な語法や緻密な英語表現が問題になるので、どの箇所がどのような理由でどのように直ったのかを自分の目で確認できるかどうかが重要になる。添削を受ける依頼者自身にそれを確認できる力が無ければ満足も不満足もあり得ない。どこがどう直ったのかを誰でも単純に確認できる自転車修理とは異なる。

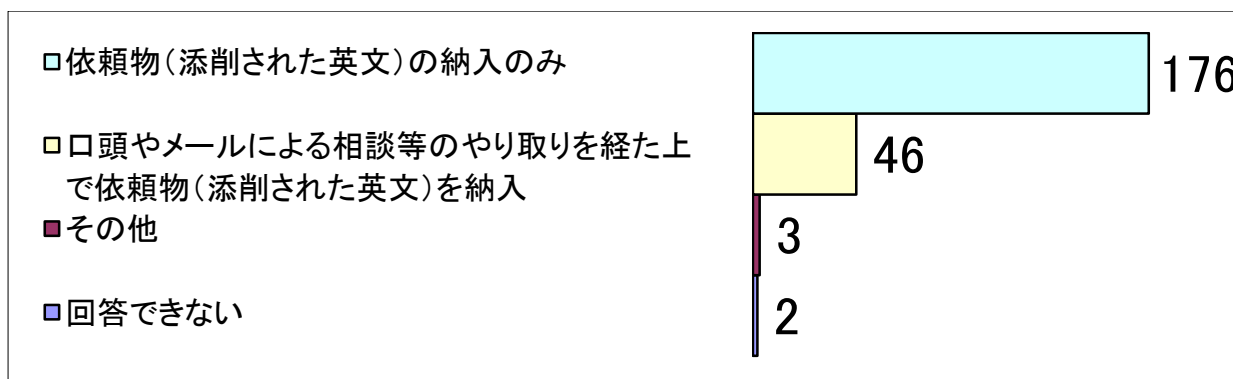


0b. 上記Jで「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。翻訳または添削サービスの納入までの時間についてどのようなことを感じましたか。



ほとんどが適切だったと回答したことについては、専門業者各社が、納入時期についての取り決めを事前に定めており現にほぼその通りに行われていることと大きく関係する。多くの専門業者において、数日以内に添削を終了し返却するという方針が立てられている。また、多くの場合、e-mailでの送信により送付時間が短縮されている。これらのことにより、納入時期にたいする高い満足度が実現されているものと思われる。もちろん、納入までの時間は、満足度を測る多くの指標の一つに過ぎない。学术论文の添削作業がいかに緻密で高度な作業内容を含むものであるかを考えれば、限られた納入期限でサービスの質が確保されるのかどうか、という不安もぬぐえない。

0c. 上記Jで「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。翻訳または添削サービスの納入までの添削のプロセスはどのようなものでしたか。

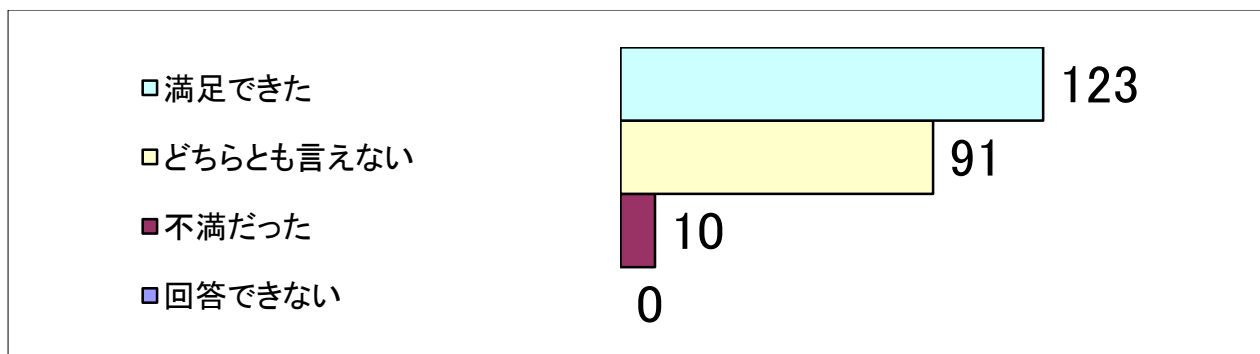


学术论文の添削は高度なレベルの緻密な作業を伴うが、それは他者が書いた英文を「読む」あるいは「真意を読み取る」という作業が基本になる。その際の読み取りの精度を高めるためには、筆者との間で質疑と確認のやりとりが必要になる。とりわけ、他の設問への記述回答にも示唆されているように添削者は「こちらの研究内容がよくわかっている」ことが望ましいのであるが、論文内容への添削者の側の理

解度が必ずしも依頼者側に見えない状態で依頼し、出来上がった添削物を単純に受け取る、という実態が上記の設問の回答（176）の中で大きく浮かび上がってくる。満足度を問う他の設問の記述回答を見る限りでは、依頼者と添削者の間のやり取りが無いあるいは乏しいために不満が募っている側面も垣間見える。しかし、どこをどのような理由でどのように直したのかを示す添削履歴を Word ファイルで返してくるシステムをとっている業者もあり（設問 0e の記述回答等による）、添削者が理解出来ないところはその旨記載されているので、理解度のズレが仮にあったとしたらそれが見えるような工夫がされている。そのような場合、添削された原稿を再度精査し、添削者との間で質疑のやりとりをすることは最も望ましい作業であろう。「理解度のズレ」が解決されないまま納入物をそのまま完成品とするのか、最終仕上げへ向けてさらに時間と労力をかけて英文を磨き上げるのかという部分については、上記の設問設定と回答結果からは見えてこない。

なお、業者としては当然のことであろうが、サービス内容のレベル分けを料金設定と組み合わせてAコース、Bコース、Cコースというようにシステム化している業者がある。予算が潤沢には無い若手研究者にとっては、論文仕上げの精度をさらに高めるかどうかを、金銭的な秤にかけて判断することになる。もっとも、添削業者への委託はあくまで外部に存在する一つの選択肢であり、また、この設問で問題にしている「納入へのプロセス」はあくまで英文の最終仕上げにいたるまでの一つのプロセスに過ぎない、と考えれば、最終的には自己責任において自らの英文を自らの能力と努力で仕上げるものである、という大前提は確認しておく必要がある。

0d. 上記Jで「1. 専門業者」と回答した方にお尋ねします。翻訳または添削サービスの満足度についてどのように感じましたか。



「満足できた」が123で半数を超えている。他方、「どちらとも言えない」と「不満だった」を合わせて101は「満足感を持つには至っていない」と見なすことができる。この数字を見ながら記述回答を読むと様々な反応をうかがうことができる（次の設問参照）。

0e. 差し支えなければ、業者から受けたサービスについて具体的にご記入下さい。（添削方法、業務の質、業者名等）

添削サービスの満足度に関して上記の設問で大まかにとらえることが出来たが、この設問では様々な個別の見解を聞くことができた。記述の内容は大きく分けて、添削方法に関する情報提供、および添削サービスの質の満足度に関する感想、の二つに分けることができるが、添削方法と満足度は密接に関わっているため、相互に対応させて見ていきたい。また、次の設問Pの回答の中にこの設問0eの回答にふさわしいものも多く見受けられたので、ここにそれを含めて見てみたい。

満足した、つまり、添削サービスを依頼して、その成果を確認した、という趣旨の回答は、次のような記述にみられる。

- 「（ある特定の業者名を挙げて）質は極めて高い」
- 「（ある特定の業者名を挙げて）質は非常に高く、細かい文法の質問にも逐一メールで答えてくれる。」
- 「添削を受けた論文は査読者に英語を誉められたことがある。」
- 「細かな文法のミスや文の構成の入れかえなど、英語として自然な流れにしてもらえるなど、論文の質を上げることに役立ったと思われる。」

現在、日本で利用できる添削業者は多数にのぼるが、複数の業者を試してみて、気に入った（つまり満足度の高い）業者を決めて利用している状況も次の記述にうかがえる。

- 「現在使用している業者は比較的妥当（金額・内容とも）なので不満はない。」（設問Pの回答）

添削後の相互のやり取りはどうあるべきかについて前述したが、下記のような記述は、望ましいやり取りが現実に行われていることを示している。

- 「メールで複数回やり取りする。その上でお互い疑問点を解消し、よりよい表現に繋げる。」

ここにうかがえるのは、ほとんど共同作業ともいえるようなプロセスを経て、満足のできる成果を目指す態度である。現状を見渡したうえでこのコメントを読むと、一つのあるべき姿が見えるようである。

また、添削を受けることによって依頼者自身がある種の「学習」をすることができた、という意味で次の回答も興味深い。

- 「冠詞の使い方、言い回しなど、勉強になった。」

しかしながら次のように、添削された内容に納得が出来ない場合、その後の手立て

が提供されるのかどうかは重要なポイントになる。

- 「同じ意味の単語に置き換えられたことのみで、なんで変える必要があったのかよく分からなかった。」
- 「結果については満足しているが、学習するためのシステムではないので、何故校正が入ったか、理由については想像する他なく、なかなか上達しない。」

回答者たちは、返された添削物を前にして首をかしげるだけで終わったのだろうか。納得のできない点について真偽を質したり説明を求めるプロセスがあるかどうかは、依頼者が添削を受けることで「学習」していくかどうかという問題に繋がる。この問題は大きな課題を生む。つまり、料金を支払って専門業者からサービスを受け、単に研究上の成果物の質を上げるという目的においてのみ英文添削の問題をとらえるのではなく、研究者自身の質の向上も視野に置いてとらえるとすれば、研究者の所属組織が研究者を教育的にどのように支援するかという問題に繋がるからである。

さて、添削物の納入およびその後のプロセスにおいて、具体的には次のような方法が取られていることが分かった。（具体的な方法については各専門業者のホームページで説明されているので、詳しくはそちらを参照。）

- 「Wordに添削履歴が残るように。業者が理解出来ないところはそのように記載。添削内容について、こちらからも質問可能。」
- 「細かい文法の質問にも逐一メールで答えてくれる。」

次に、業者によって、あるいは同じ業者でも担当者によって添削の仕方が異なるようだ、という印象を述べている回答が多く見られた。

- 「2度同じ内容の文章を添削していただいたが、担当者によって添削が多少異なると感じた。」
- 「業者よりも担当する人によって出来が違う。」
- 「業者によってクオリティーがかなり異なる。論文をあまり読んだことのないと思われる人が英訳していると思われるケースがある。」（設問Pの回答）
- 「品質は当たる担当者によるという印象。担当者によっては悪くない。」
- 「やや添削者にばらつきがあるようだ。」
- 「担当者(添削を行う)により quality にばらつきがある。」
- 「大概満足しているが校閲者にもよる。」
- 「会社や個人によって添削のパターンが異なり、基準を理解出来ないことがある。」（設問Pの回答）

同じ業者でも添削者によって質にばらつきがあるとしたら、その理由は二つ考えられる。一つは、添削者スタッフの中に質の格差が存在すること。もう一つは、添削者の専門性が論文の内容とぴったり合っていないことである。第1の問題は、依頼

者としては如何ともしがたいが、一定の質の確保を望むのは料金を支払う以上は当然のことである。第2の問題は、専門性の近さの問題、あるいは依頼者と添削者の間の専門の適合性が確保されているかどうかという問題である。ミスマッチを解消するための手立てはありうるであろう。回答にあるように、何度も同じ業者を利用してばらつきを感じるのであれば、スタッフの中で最も相応しい担当者を指定する道も開けているかもしれない。この点、業者の側の配慮に期待することになる。

質に対する満足度の問題についてさらに見ていこう。文法的誤りのチェック程度でよいのか、文章を磨きあげたいのか、等々の要求水準に応じて満足度も異なってくるであろう。英文を磨くという観点で、どこまで添削者に期待するか、あるいは期待できるか、という問題は業者の料金設定の問題とも関連するが、そこまで踏み込んだ調査は、今回のアンケートの手に余ることであった。一般的に言えば、委託業務の内容は事前に明示すべき、という商取引の基本原則が守られているかどうか、サービスに対する満足度を左右する。添削業務において、何をどのようどの程度みてくれるのかという、サービス内容に関する事前合意が行われていることが重要だと考えられる。次のような反応も、そのような意味合いで読むことができる。

- 「文法ミスなどは直してありますが、より英語らしい表現での添削はほとんど行われていない感じでした。」
- 「[添削者が] 本当に専門家なのかは分からない。また、英語、米語で、言い回しなどに違いがあるように思う。基本的に文法的なものは直されず、ほとんどがaとtheのチェックのような感じで、英文校閲に出す意味があるのかどうか、少し疑問に思っている。英文校閲に出しても(あるいはアメリカの友人(同一分野)にチェックしてもらっても)、論文のレフリーから「英語がおかしい」というコメントがつくこともある。結局、自分の言い回しに近いかどうかだけが判断基準なのでは?とってしまう。」
- 「修正されている箇所の「修正の重要度」が分かりにくいように思えることがありました。(修正前でもよいように思える)。修正が必要なのか修正しなくてもよい程度なのかが明らかであってほしいように思いました。」

添削の質に関して否定的な印象の表明も見られた。

- 「パフォーマンスの低い印象でした。」
- 「業者は玉石混淆状態と理解します。」
- 「テクニカルタームを多く含む学術論文では、英語のネイティブスピーカーの中でも英語用法がまちまちであることがよくあり、ある人が添削して是としたものを、別の添削者が否定することが多々ある。」

さらに否定的見解を強く吐露する回答があった。

- 「より悪い英語になって戻ってきました。」
- 「私が見ても品質が悪かった」

悪くなって戻ってきた、とは考えられない話であり、具体的にどこがどのように悪かったのかが述べられていないので真相は明らかではない。後に述べるような専門性のミスマッチの問題も考えられる。ただ、このような回答によって我々は、誰に添削を頼むべきか、という重要な問題に向き合わされる。さらに、添削において料金を支払って得られる対価は何か、依頼者自身の水準と照らし合わせてさらにどの水準まで求めるのか、そもそも英文添削とは何か等々の本質的な問題を考えるきっかけになるだろう。

不満足のかなりの部分が論文内容の専門性に関わるものであることは想像できる。英文添削専門業者とはいえ、英語の領域を越えた内容に関する専門性をどの程度求めるかについては、判断が難しいであろう。ただ、回答の中に次のようなコメントがあったのは、自立した目を通して添削サービスの質を判定する研究者の存在がうかがわれる。

- 「専門的な部分で一部間違った添削もある。」
- 「専門用語あるいは内容についてやや誤った添削結果の場合がある。」
- 「専門性の理解の不足を(少しだが)感じた。」
- 「当該分野の専門性の理解が不可欠。テクニカルタームの用法の誤りが、本論の主張に関わることもあるので、単に英文を添削するだけでは不満が残ってしまう。」  
(設問Pの回答)
- 「逆に専門的な部分で不必要な部分まで添削されるので、現在は依頼していません。」(設問Pの回答)
- 「校正者が専門用語を必ずしも適切に認識していない可能性があり、その点が心配」(設問Pの回答)
- 「添削された点を審査者にもとに戻されたことが多い。ネイティブであればよいわけではなく、専門の研究者でないと役に立たない」(設問Pの回答)
- 「ある程度その分野の事を理解している人に添削してもらわないと、良い添削はできないのではないかと思う。」
- 「専門的知識が校正者にあるかどうかで、自分のいいたいことがかえられてしまう。」(設問Pの回答)
- 「時間の節約になると思うが、必ずしも分野に精通した人の英文ではないのだから、まかせてよいものかどうか。」(設問Pの回答)
- 「結局、その分野の研究者でなければ他人の添削はムリ」(設問Pの回答)
- 「必ずしも当分野を理解していないので不満がある。」(設問Pの回答)

添削者の側に専門的な内容に対する理解不足がありうること、そして理解不足のまま英文に添削の朱書きを入れる可能性があることは当然予想されることなので、やはり先に述べたような双方のやり取りができるシステムができているかどうか重要なポイントになる。とはいえ下記のような事態は100%避けることはできないだろう。

●「内容を理解せず、文法的な面だけで機械的に対処されるので、文章の意図が変わってしまうことが多い。」

この回答者は実は、このコメントに「まあ仕方ないが」という前置きを置いている。これは一種の「見切り」をもって添削物を判定しているように思われる。添削者が下した判断を取捨選択した後に、最終仕上げをするのは研究者自身だという自覚があるかどうかは、最終的にどのような論文ができるかに大きく関わってくると考えられる。すでに見たように、設問Pの回答にはこの点に関連する記述が多く見受けられた。他者の見解から一定の距離を置き、取捨選択等しながら自分自身の英文を組み立てていく自覚的な書き手となることは難しい。また、多くを期待すると幻滅も大きい。次のように、そもそも添削を頼むことについて冷ややかな態度を見せる回答者もいた。

- 「専門的内容を理解していない人(例、業者)には頼む気がしない」
- 「内容を理解している人でないと添削がおかしいことが多々ある。」（設問Pの回答）

この流れにある回答は次のようなものである。

- 「数学を研究しているが、数学関係者以外の人に添削してもらおう気は起きない。
- 「そもそもオリジナリティーの高い文系の論文を自分以外の誰が英文にできるのか？」
- 「論文の分野に明るく、かつ、研究室での過去の業績にまで理解が深くなければ、論文作成をそのまま依頼することなど出来ない。」
- 「内容をある程度理解できるだけの知識を持った人でないと、添削は無理。(内容の取り違いなどで二度手間になる)」（設問Pの回答）

設問Pの回答でも「単に英語の問題だけではなく、内容の深い理解が必要」との指摘があった。それにしても「専門的内容を理解している人」でしかも英語の添削という負担の大きい実務を依頼できる人は容易に得られるものではない。

- 「彼らにも得意、不得意がある」

という指摘は、専門業者のあり方に一定の理解を示すものであるが、この回答の後には、依頼者側の負担を嘆く声、つまり「信頼できる業者を見つけるのが大変」という言葉が続く。そのための情報を求める声もある。

- 「どの業者が良いのかについての情報が少ない。」（設問Pの回答）

ほとんど絶望的な声も聞かれる。

- 「内容を理解し、添削可能な人はほとんどいない。(同分野では、競争相手だったりする) (設問Pの回答)

専門性のミスマッチとは別に、英文添削に対する態度として全般的に言えることは、ネイティブ・スピーカーの添削ということで闇雲にすべてを受け入れてしまうことは危険だ、ということである。回答の中にそのような意識がうかがわれるものがあった。

- 「基本的文法ミスは直るが、多くを期待してはいけない。必ず、再チェックが必要。」設問Pの回答)

「多くを期待してはいけない」と一種の見切りをつけるかどうかは、英語のライティングという実は総合的かつ多面的な作業の中で添削をどう位置づけるか、という難しい問題にも絡んでくる。次のような不満が出てくるのは如何ともしがたい。

- 「文法上間違っていないレベルまでは直してくれるがネイティブらしい言い回しというレベルまでは直してくれない点が不満です。」

一方で、他力本願的な態度ではなく自分自身に立ち返り、ライティング力を高める努力の大切さを指摘する声もある。

- 「こちらが改善していくことが重要」
- 「正しく自分のニュアンスを伝えるには、ネイティブの助言を受けて自分で考えるしかありません。」
- 「最終的には自分で判断する」

不満かどうかというレベルを越えて、添削依頼そのものを消極的に見る立場もあり、次のようにいわば醒めた目で見える回答もあった。

- 「ネイティブだからといって十分なライティングの能力があるわけではなく、専門業者でも同様と思われる。」

次のような、当然過ぎるコメントもあった。

- 「文法の添削が中心で論文内容の質が向上することはない。」

当たり前と言えはその通りであるが、研究者のライティング力向上という観点で見れば、大きな課題を含んでいると見ることもできる。当然、論文内容の質的向上は「英文添削」の専門業者に求めるべきことではない。ただ、表面的な英語に手を入れる程度の作業に関するかぎりには、論文を書くという総合的な知的作業のマイナーな部分を問題にしているにすぎない。添削者に寄りかかるのではなく、自覚した書



き手となるためには、パラグラフライティング等の英文構成技能にまで踏み込み、全体を書きなおす、つまりrewritingまで取り入れた総合的な作業として英文作成の課題をとらえる必要があるだろう。さらに言えば、研究活動の全体の枠組みの中で、専門研究の追究と言語表現の探求を一体的に進めることが理想であろう。専門で手がふさがっている研究者が英文添削への期待とその結果に対する失望の間で悩んでいる様子が今回のアンケートの回答から垣間見える。困難を打開するための糸口がないかどうか、以下の設問（P, S, U）への回答にわずかなヒントが隠されているように思われる。

P. 上記 I の「今までに、英語論文作成などにあたって他者に添削を依頼したことがありますか」の質問について、「ある」、「ない」いずれを選んだ方にもお尋ねします。添削依頼について考えていることがあれば自由にご記入ください。

この設問の趣旨は、N~0の設問では蔽いきれない添削依頼の実態を少しでも掬い取るためである。まず、添削の必要性を説く声から見ていきたい。

- 「安心感は増すので、[添削は]必要と考えます。」
- 「査読(レフリー)をすることも多いが、英語が悪い論文も多い。研究者(海外・日本ともに)はもっと積極的に添削を利用した方が良いと思う。」
- 「本来はなしで書ければよいが、英語は母国語ではないので必要。論文は形になって残ってしまうので、少々金がかかっても添削してくれるならその方が良い。」
- 「ネイティブでないと分からないニュアンスがある。やはり添削は必要だと思う。」
- 「必要不可欠と考える。英語のニュアンスの違いなど、ネイティブでこそ分かることもある。」

積極的な評価というよりは、やむを得ない、といった動機から添削を依頼する切実な状況は次の回答に垣間見える。

- 「時間を節約するためには利用せざるをえない。」

誰に添削を頼んだかという J の設問で、知人に添削を頼み、食事をごちそうしてお礼とした、という回答もいくつかあったが、料金を支払ってビジネスライクに業務委託する、という方向を肯定する声として次のような記述もあった。

- 「知人に頼むのは負担をかけるのでよくない。」
- 「添削依頼は業者をお願いする方が気が楽である。」

業者以外の方面に依頼する場合、適任者を自分で見つけなければならない煩雑さ、人

間関係の問題、謝金の問題等がつかまとう。(謝金支払いの実態については、設問 M で取り扱った。)このような問題から免れるための消極的な利点から添削業者を評価する声はそれなりに理解できるが、次の記述に見られるように、やむを得ずといった動機もあることがわかる。

- 「時間と労力を求める上に、研究費で知人に支払うことができないので、業者に依頼せざるを得ない。」
- 「ネイティブの研究者や留学生に依頼したほうが、分野も近いし、細かいニュアンスも伝えられるが、どのようにお礼すべきか困るので、やらずにいる。」
- 「研究費(科研費その他)の使用方法がわかりにくく、使用をためらうことがある。」

もっとも、ここで問題とされている研究費等の経費の使用方法に関連しては、各研究教育機関で、一定の取り決めがあるはずである。研究論文の添削のため、という目的の整合性があえば、手続きをうまく利用することで、経費支出の道は開けているはずである。

外部の専門業者に依頼する場合の不安を表明する次のような回答もあった。

- 「論文内容流出に対する不安(特に専門業者(第三者)に依頼する場合)」

この件について、たしかに依頼者側に不安があるのは納得できる。そしてこの納得を業者側も共有しているとすれば、業者の側にはセキュリティ上の保証を示す役目、あるいは義務があるはずである。そして添削の質の保証だけでなく、この点でもシステム整備ができておりそれを保証できる業者が優れた業者だと言えよう。

次に、現実的な問題として、料金についての記述が多かったので見ていきたい。まず、利用したことのない人の声を聞いてみよう。

- 「添削サービスがもっと普及すれば、競争原理になって添削の質の向上と料金の低下が見込めるので良いのではと思います。料金が高そうなイメージがあるので、まだ一度もサービスを利用したことはありません。一度使ってみたいと思います。」
- 「利用したことはありませんが、見たところ高すぎる。」

後述するように、このような見方は多数意見ではなく、高いと見るか妥当と見るかは顧客次第だろう。たしかに大学院博士後期課程レベルの研究者の卵、あるいは乏しい研究予算をやりくりする若手研究者にとってみれば、高額であるというイメージはぬぐえないだろう。ただ、利用したことが無ければ高額を支払って受けた対価の価値も見えてこない。

- 「高い料金が必要なので、すべての論文について依頼できない。」
- 「お金がかかるので、経済的余力がある時に依頼している。」

という回答にあるように、論文の産出数が多い人の場合、すべての論文にわたって添削依頼していると、研究予算の大部分が添削に費やされることになるということも現実である。

しかしながら、上記設問 0aで分かったように、料金は適切だったという回答が多数を占め、高すぎた、とする回答は全体の 27%弱であった。いずれも実際の利用経験を持つ回答者の見解である。次の回答にもうかがえるように、研究者が学術研究に関わるサービスを購入する場合であっても一般的な購入者つまり消費者としての判断が下される。

●「コストが一番の問題だが、安くて高品質は不可能だと思う。」

つまり、料金の適切さは、費用対効果に照らして各自が判断することであろう。安ければ安いなりに、質の面で不安が出てくる。逆を言えば高品質を求めるのであれば高い料金は受け入れざるを得ない、ということになる。研究費が潤沢にあれば添削によって論文の英語を磨き上げることができる、そのためには

●「研究費がしっかりあれば、よい業者に依頼できる」

という展望も表明される。他方、料金そのものよりも料金の設定方法に対する不満を述べる声もある。

●「もとの英文の質で、添削の手間は大きく異なるはずだが、料金が分量で決まるのが不満。元々うまく書いていてあまり直されなくても同じ料金。」

これは添削という業務の依頼が、「文書」つまり「添削物」という「物」のやり取りによって行われる、という事情によるのであろう。添削を依頼する側とサービスを提供する側とが共同してライティングという知的作業を行うわけではなく、添削の現場を確認することは難しい。一種の個人教授による添削であれば、上記のような不満は少なくなるであろう。料金をめぐる見解は、添削内容と料金設定の問題を越えて、依頼者と添削者のダイナミックな応答が行われるシステムになっているかどうかという問題に繋がっていく。設問 0e で見たように、依頼者からの原稿送付と業者からの添削物納入という単純な往復だけで終わるのではなく、依頼者と添削者が相互の理解を突き合わせるという作業は非常に重要である。その点に触れる興味深い指摘は多数あった。

●「依頼者と添削者は密にコミュニケーションをとるべき。文章の意図が正確に伝わっているか確認する必要がある。」

この「密にコミュニケーション」をとるということが具体的にどのような状況を指しているのかは不明であるが、次のように「依頼者のクセ」まで読みとってケアをしていく添削のあり方は、確かに有効な提案ではあろう。

●「自分のライティングの<クセ>を指摘してもらえると、ライティングスキルの向上に繋がると思う。そのためには、同じ添削者にある程度の期間面倒を見続けてもらうのが必要なことは理解している。」

この回答には「同じ添削者にある程度の期間面倒を見続けてもらう」という提案が成されているが、そのようなシステムおよびその効果が保証されている事例があるとするれば、それは極めて幸運なことだと思われる。専門業者の一般的なシステムでは、電子メールによる添付文書の送信やメッセージによる質疑応答がせいぜいである。また、依頼者と添削者が顔を合わせることはない。しかし対話型の添削は実際、回答者の願望としていくつも挙げられていた。

●「実際にフェイス・トゥ・フェイスで添削していただけるような環境があるとありがたいです。」

●「対話しながらできるサービスがほしい。」

このような願望は、英文添削が、本質的にはきわめて人間的な要素を含んだ「言語」という実態をめぐって行われることと関連があるだろう。言語には、曖昧さや多義性、ニュアンス、多面的な語法等、送り手と受け手の間で誤解を生ずる可能性をたえず含んでいる。もちろん、フェイス・トゥ・フェイスでの作業がすべてを解消するわけではなく、対面して口頭でのやりとりをするには多くの（場合によっては余分な）時間を費やすであろうし、そもそも依頼者の側に、添削物を前にして口頭で説明を行う英語能力があるとも限らない。

フェイス・トゥ・フェイスでのやり取りをしながら、添削者が依頼者の「クセ」を読み取ることができるとすれば、それは、一種のホームドクターのような役割である。これは一種の理想かもしれない。添削者にこのような役割を期待するには、添削者の側に高い能力が求められる。また、依頼者の側にもそれを可能にする十分な時間的、経済的態勢が無ければならないだろう。ある回答者は、残念ながら「日常的にそういう状況は望めない」という言葉で記述を締めくくっている。

●「専門家が近くにおいて、対話しながら、添削してもらうのが一番だが(そうしてもらったこともある)、日常的にそういう状況は望めない」

この関連で、設問Sで問いかけた学内のライティングセンターのような設備を求める声も聞かれる。

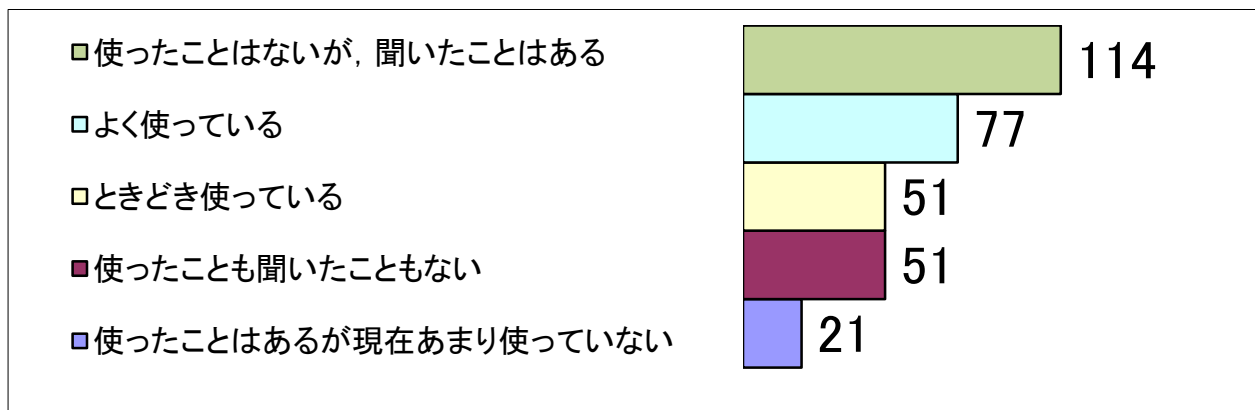
●「論文等、添削サービスが学内にあればよいと思う。」

●「学内に相談しながらチェックできる部署がほしい。米国などの国でも当然のようにあるのだが…」

●「所属大学に、英文校正の部門があると、より特化して、尽速に成果を挙げられると思う。」

高い料金を支払って外部へ発注することの手間を考えた場合、身近にサポートが受けられる環境は望ましいことであろう。残るのは、各研究教育機関でそれがまかなえるか、という問題である。

Q. 近年、コンピュータによる英語支援ツール（語法データベース、コーパス、論文作成支援ソフト、ワープロの文法文体チェッカー機能等）が身近になってきました。このようなツールのいずれかを使ったことがありますか。



設問I～Pで英文添削を取り扱い、サポートを他者に求める方向を探ったのに対し、この設問では、書き手の手元において文房具と同様の気安さで使えるライティング支援ツールがどの程度普及しているかを探った。「よく使う」「ときどき使う」を合わせ、実質的に使っている回答者は、ほぼ4割であった。約5割が使っていない（聞いたことはある、使ったことも聞いたこともない）とのことである。ライティング・サポートの立場から考えた場合、具体的にどのように便利なツールがあるかについて情報を整理し、提供することから始めることが必要であろう。使い方講習会を開くことは一案であろう。さらに、各人が各人の能力と目的に合わせて一定期間使用し、その成果をフィードバックし、情報交換をするなどが考えられる。

ここではライティング支援ツールについての詳述は控える。一つ言えることは、ライティング支援ツールが、英文添削を受ける前の原稿精度を高めるプロセスでかなり有効な働きをするのではないかということである。もし、時制、数、動詞の活用、構文等、本当は自己添削で足りる側面をライティング支援ツールで解決することが可能であれば、必ずしも他者に添削してもらうには及ばないケースも出てくるだろう。経費と時間の負担も減るし、また、自学自習的な作用もある。0eの設問に対するコメントで「こちらが改善していくことが重要」、つまり、他者に添削してもらうだけでは必ずしも自分自身の勉強にはならない、という趣旨のコメントも見られた。書き手自身が手を抜いて、後は経費を払って添削者に丸投げ、という意識では、かりに生産物としての英語論文の質が上がっても、書き手自身の英語力向上は望めない。書き手自身のライティング力向上には、専門業者の設問の項で提起されたような「フェイス・トゥ・フェイスによる」

個別教授的な添削指導やライティング講習を受けることも有効である。しかし経費・時間がかからず、各自が日常的に行うライティング作業の中で手近に使えることは、ライティング支援ツールの大きなメリットである。いくつかの支援ツールを複合的に組み合わせ、自分流にあつらえた添削補助ツールがあれば大いに役立つであろう。この方面の技術開発に関しては、今後の展開が望まれるところである。

R. これまで使ってみて便利だと思った英語支援ツールや、このようなものがあつたら良いと思うツール等について、自由にご記入ください。

最もよく使われているツールの一つに「英辞郎」（合計6件、on the Web含む）が挙げられていたのはやや意外であった。必ずしも研究者向けに作られた辞書ではないからである。アルク（SPACE ALC [www.alc.co.jp](http://www.alc.co.jp)）のWeb辞書も記載されていたが（4件）、これは「英辞郎 on the Web」を指すものと思われる。同様のタイプのオンライン辞書で、共起表現の検索もできるweblio (<http://ejje.weblio.jp/>) も2件あつた。

語法検索、特に興味を惹かれたのは、WebLSD (Online life Science Dictionary) を挙げる回答であり、11件に上つた。そのうち4件については、共起表現の検索に便利である旨が表記されていた。アルク、googleとともに「三種の神器である」というコメントもあり、興味深い。

もっとも言及が多かつたのはGoogleによる検索で、16件に上つた。特にGoogle Scholarを挙げていたのは（3件）、学術英語に絞り込むための当然の方策であろう。同様の検索エンジンでEReK（イーレック）が1件挙げられていた

ワープロソフトで英文作成を行うことがほとんどであろうから、Word（マイクロソフト）のスペルチェック・文法チェック機能がよく使われていることはよくわかる（13件）。特別なライティング支援ソフトを購入して使っている回答者もいた。

上記のような使用状況を記載した回答者は、記述回答で「重宝している」等のコメントがあり、日常的に使いこんでいる様子がうかがわれる。他方、「使用経験なし」「よく知りません」「使ったことはない」等の回答もあつた。また、次のように支援ツールそのものに疑問を呈する記述もあつた。

- 「英訳のソフトをためしたことがあるが、全く不完全であつた。」
- 「役に立ったと言えるものはほとんどない」
- 「人間でもダメなのにツールでは不可能。特定の分野に特化したツールなら別だが、商売にならないだろう。（世界で10%にも満たない、とかいう分野も多いので。）」
- 「あつたとしてもそのツールを使うには心もとない。たぶん自分で書いてしまうと思う。」

この設問に対しては、どのようなツールを使っているかに対する回答がほとんどであつたが、一つだけ下記のような記述もあり、使用に際しての注意点について一定の認識を持っていることがうかがえる。

●「よくやるのは、文献データベースの全文検索を使って語の用例や表現の例を探すこと。ただ、それで見つけた用例が正しいという保証がなく、「ありがちな誤り」であるかもしれないのが難点。」

この方面については、英語の語法研究やコーパス言語学が、語法検索用データベースの構築やその使用法についてどのような知見を提供することができるか、大きな期待が寄せられるところである。

S. 日本国内で、英語ライティング添削等の相談に応じるセンター等を学内に設置している大学が複数存在します。これらは主に、学生のレポート作成支援を目的としており、かならずしも研究者向けの論文作成、口頭発表、研究者交流のような学術研究目的の英語支援設備ではありません。このような設備あるいはプログラム（ワークショップ、セミナー等）について、ご意見等ございましたら自由にご記入ください。

ここで念頭に置いているのは、早稲田大学、東京大学、政策研究大学院大学等で設置されているようなライティングセンターの試みである。これらのセンターは、ライティング指導のための独自の教育プログラムに基づいて運営されており、基本的に学部・大学院の学生の教育が目的である。「研究者のための英語」を考える場合、教育機関としてではなくむしろ研究機関としての大学の研究支援の機能が問題になる。したがって、ここで投げかけているような学内設備は、上記のような既存のライティングセンターとは目的も機能も異なるはずである。

ライティング相談窓口のような設備の提案について寄せられた意見は「歓迎」と「困難あるいは無意味」という二つに大きく分かれた。

まず、肯定的な意見は37件あり、「あればぜひ活用したい」「良い取り組みだと思います」「必要である」「(あれば)助かる」が代表的な回答であった。その理由として次のような記述がみられた。

●「ぜひ研究用にも設備・プログラムを充実させてほしい。すぐれた研究者が英語の問題で評価されないのはとても悲しい事だと思う。」

●「研究者向けの英語支援設備もあるとよいと思う。」

●「研究者にとっては論文添削をしてもらえる施設があれば便利なのではないか。」

●「あったほうがよいと思います。若者の英語力向上に繋がります。」

●「必要である。研究費の少ない人は自腹で校正を頼んでいる。」

●「私はアメリカの大学院卒(修士、博士共に)なので、英語のレポート・卒論etc無料で大学がサポートしているものを使用して、大変に助かりました。教員にも(できれば各専門エリア)、このようなサポートがあればよいのではないかと思います。特に専門分野のEditorの方が常駐しているのは大変ありがたいのではないのでしょうか。」

●「前任地で論文添削を依頼したことがある。修正内容について、直接やり取りしな

がら確認できるので非常に良かった。」

●「論文全体の添削・校閲ではなく、どうしても自信の持てない表現や単語の選択などについて質問できる信頼のおけるサービスがあればありがたいと思っています。」

特にコストのメリットに言及する意見があった。次の通りである。

●「もし大学内に設置されていれば、コストも低いでしょうし、是非利用したいと思います。業者は1ページ5000円とか、と言っています。非常に高いと思います。」

●「学内にスペシャリストが一定数おり、低いコストで活用できれば、全体としての業績、語学レベルの向上に繋がると思う。」

●「あれば利用したいと思う。(金銭的負担が軽減されるのであれば。)」

また、英語添削相談窓口のようなものは競争力をつけるためにも望ましいとする観点、あるいは、英語の重要性に照らして望ましいとする観点が見られる。

●「大学の競争力の向上という観点から教員の指導は極めて望ましい。また学生よりも効果が高いと思う」

その他、設置を評価する意見の中で、「簡単な添削で良いので、支援のしくみができるとうれしい」、あるいは「学内で論文作成時に添削がしてもらえれば助かる」あるいは提案として「学生向け(教育目的)と研究者向け(研究目的)を明確に区別し、目的に合致した英語支援設備が必要。研究者にとって学生向けの内容ではあまり役に立たないと思う(そもそも別物)」という声が出された。

他方、評価しないという意見については、設置・運営の困難さや有効性への疑問が多くを占めた。

●「研究者向けの設備があれば助かりますが、一般には、実現は、難しいでしょう。」

●「そういうセクションがあれば便利かと思いますが、実現は難しそうです。」

●「便利そうだが、実際にはあまり利用しないと思う。というのも、他の業務に忙しく、相談する時間があまりない。」

困難さについては、添削の専門業者の設問で浮かび上がったものと同様に、「英語」という括りだけで、多岐に亘る専門分野に対応する部署を設置することが可能かどうか、という点に疑問が投げかけられた。

●「学内にあると便利だとは思いますが、多様な専門分野に限られたスタッフで対応できるかは疑問である。」

●「多分野に対応するには、英語教師だけでは困難です。」

●「ニーズが非常に多様なので、機関での対応は難しいかもしれません。将来的には特定の専門分野を機関横断的に扱うプログラムがあると良いと思います。」

●「基本的な英文作成には有効かもしれないが、論文作成においては、分野特有の用



語の理解等，その分野の論文をどれだけ読んだかが効いてくる。分野ごとの対応が出来なければ，外部業者に頼むのと変わらないのではないか？」

●「個人的には論文添削サービスがほしいが，自分の分野を理解できている人でないと無理なので難しいと思う。」

●「専門分野によってテクニカル単語があるので難しいかもしれません。」

●「学生のレポート作成にはよいかもしれませんが，研究者向けの論文作成等については難しいかもしれません。なぜなら，研究分野によっては論文で使う時制などに差があり，細かいニュアンスがかなり異なる印象があるからです。」

大規模な総合大学で一か所の設備では，対応が一般的になりすぎて個別のケアがしにくいという心配はある。各研究者が個別に支援を模索する方が効率的であろうという趣旨の次のような意見もあった。

●「英文校正は，各研究者の好みの問題もあり大学で一元化されるよりも，自分にあった業者に依頼するようになる。センターを整備，維持する予算を，個別研究者が業者に英文校正を発注するときの補助に回してほしい。」

●「自分で何度も書いて添削を専門としているネイティブに添削してもらうことによりスキルアップする方が現実的。」

次の回答者は，高度な研究水準に対応する本格的な設備が，経費面，運営面での困難を伴う点を指摘している。

●「研究者向けのより高度なものがあれば，もちろん有用だとは思いますが，コストが現実的であるか難しそうです。(そこまで高度な，専門的な論文を扱える人材が確保できるか，含む)」

たしかに，趣旨がいかに評価されても，この種の設備を設置・運営する計画について，費用対効果の見込みを示し，組織的な予算措置を取り付けることは難しい。

各人の努力を重視する立場から，特に施設を設置して組織的に支援する必要はないとする次のような意見もあった。

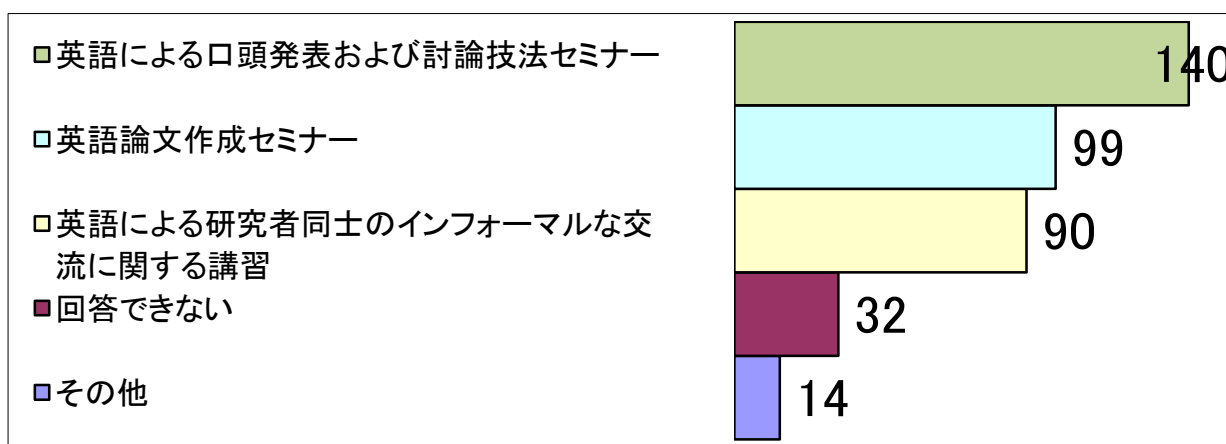
●「不要と思います。個々の研究者が論文を書くくらいの英語力はつけるべきと思います」

●「私はロンドン大学で毎週のようにレポートや発表をさせられて体得しました。」

以上，結論としては賛否両論というところである。あったら助かる，という希望も多いのは理解できる。この声は，先に見た添削専門業者のサービスをめぐる問題点を解決する糸口としての学内ライティング・センターへと繋がっていく。他方，予算が厳しい中で，設備導入の経費と運営の経費に照らしてどのような成果が期待できるか，という判断は難しい。研究活動は通常，研究者個人あるいは研究室単位で動いている

ので、学内の総花的な設備よりも一定の専門的側面に特化した語学サポートを求めがちである。各研究室ごとに何らかのプログラムを動かしていく、という方向にも目を向けるべきであろう。その場合、何をどのように動かしていくか、という見通しに関して具体的な提案等は見られなかったが、研究者のための英語サポートを考える場合、このことは重要な課題となるであろう。

T. 本調査プロジェクトでは、ワークショップ、セミナー等の企画を検討しています。ご希望の内容を選択してください。



この設問の内容は、設問Gで投げかけた質問とかなり重複している。設問Gでは回答者自身にとって必要な訓練は何かを問うたものであったのに対し、ここではワークショップやセミナーの企画に関する一般的な希望を問うた。回答の分布から読み取れるのは、論文作成指導よりも口頭発表や討論など英語の発話に関わる技能訓練に多くの関心が寄せられていることである。これは、アンケートの数力所において記述回答で示されているように、英語論文作成はすでに一定のレベルに到達していて特段の訓練を必要とせず、むしろ口頭発表や討論は、国際学会など現実の場面に備えておくべき重要な技能でありながら日常的に訓練できていないことによるのであろう。

なお、自由記述の回答で、ワークショップやセミナーにぜひ参加したいという強い希望が表出される一方、「特に必要ない」「必要性を感じない」という声もいくつか聞かれた。具体的には、次の記述に代表されるように、「付け焼刃」的な側面を指摘する意見がいくつかあった。

- 「ワークショップ・セミナー程度で、当方の悩みが解決できるとは到底思えない。」
- 「論文作成は分野やtopicによっても異なり、1対1の対応が理想的。セミナーでどの程度目的が達成できるのか疑問。」
- 「一過性の講習ではなく、反復練習できる教材を作成して欲しい。」
- 「授業やセミナー程度では、きっかけにはなりえてもそれだけで実力がつくとは私には思えません。」

U. 研究者の立場から、英語についてのご見解、ご感想、体験談等がございましたらご記入ください。

この設問は、「研究者のための英語」という本プロジェクトを特徴づける大きな目標をめぐって、現場の研究者の方々の生の声を自由な形で掬い上げるためのものである。予想通り、さまざまな観点から、希望、展望、提案、不満、嘆息など、見識に満ちた多くのコメントが寄せられた。本アンケートの記述回答の中で、記入の分量が最も多く、大きく盛り上がった部分となった。自由な話題について記述を求める設問であったため、他の設問の内容と重複するものもあり、また、英語だけでなく、多言語の中での英語のあり方、研究者をめぐる環境や、組織としての大学のあり方等にまで及んだ。そこで、記述内容を話題ごとに大きく次のように分類しておこう。(1) 英語に関し、日本の研究者をめぐる状況を述べているもの。(2) 英語を習得し使用することの苦労を表明しているもの。(3) 研究者は英語をどのようにとらえるべきか、あるいは英語の学習にどのように取り組むべきか、という問題について一定の見解や提案を示しているもの。(4) 英語教育について、あるいは研究組織のサポートについて見解の提示あるいは何らかの提案を行っているもの。

日本の研究者をめぐる状況はどれほど厳しいものかについては現場からの声を聞くことができた。例えば、英語がうまく使えず立ち往生する場面を生々しく述べている回答が印象的である。ここでは回答者が医学研究者であることがわかるが、医学やバイオの分野は英語で発信する要請がきわめて強い分野であるという背景がある。下記に、現状の紹介、あるいは現状についての見解が含まれる記述を列挙している。

各々の研究者が異なる状況でどのような苦労をしているかについては、嘆息とも言えるような声を聞くことができた。今後のサポートのあり方を検討するための参考になる。

英語をどのようにとらえ、どのように取り組むべきかについては、様々な観点から雑多な回答が寄せられた。英語はあくまで技能であり研究者としての才能とは区別してとらえるべきであるという見解、現場における実地の経験が重要であるという指摘、教育プログラムへの期待よりもむしろ自分自身の努力を重視する意識などが示された。

英語教育やサポートのあり方については、学術目的に対応する英語の訓練を希望する声が目立った。

以下、記述回答を列挙している。

### (1) 英語に関し、日本の研究者をめぐる状況を述べているもの

●「残念ながら英語ができないと国際学会の場では全く相手にされません。質問に対してひと言も声を発することができず、失礼な話ですが“Hello? Are you here?”などと言われて立ち往生した医学研究者も何人かみました。(中略)日本は“生きていくための英語”がこれから絶対必要です。これは研究者にとどまらない話です。」

●「学会等では英語力そのものよりも、プレゼンテーションとしての完成度が問われると思います。自信がありそうか、図表が見やすいか、声が大きいか、であり文法や発音

は間違っていなければ問題ないと感じました。ソーシャライジングでは話題の設定が大切で、自国の文化や家族、ホビー等を話題にしていけるかが大事だと思います。」

●「国際的な会合における中国人研究者などの参加は目覚ましく、日本人研究者のさらなる国際会議への参加等が望まれる。」

●「海外の学会に参加して感じたことは、同じアジア人でも中国や韓国、台湾の人たちは積極的に発言をするパッションがあるということ。英語を話す、書く必要性に迫られないとなかなか上達は難しいのかと思う。」

●「海外にいる日本人研究者から、日本人の論文は内容はすばらしいのに英語表現で損をしているという話をよく聞きます。微妙なニュアンスは、10年海外にいても分からないことがあるらしく、教育でどうにかなるものか疑問です。」

●「研究所内では英語でのプレゼンを行なっています。学生たちも少しずつ慣れていくと思います。海外留学すれば、discussionも含めて、かなり英語を使いこなせる者が増えてくるのは確かですが、論文作成時に特に冠詞の使い方は今でも間違えることがあり、native speakerのチェックはありがたいと感じています。」

●「学生が英語での論文執筆や国際会議での発表に気後れすることが多いのがもったいない。また日常会話やインフォーマルな会話ができるかどうかで会議を楽しめるかどうかが大きく変わるようだ。簡単なことでも英語をしゃべる機会が増えることが重要と思う。」

●「現在も将来も、研究者(分野にもよるが)にとって、英語を使用することは必須であり、当研究科(学部)では、学部生に、ネイティブスピーカーの講師に科学英語教育をしてもらっている。大学院生向けの科学英語教育も企画しているが、講師は論文作成経験の深い一流研究者であることが望ましいため、講師を捜すのに苦労している。」

●「日本人が英語を使いこなすのは、なかなか困難と考える。日本語論文を丸々、翻訳してもらってもいいが、自分と同じ専門分野の人で内容が確実に理解できる人は少ないのではなかろうか？だとすると、やはり研究者自らが自分の英語運用能力を上げるほかはないのかとあきらめている(おそらく皆)」

●「好きではないが使うしかない道具として考えている。もう少し楽しめれば、よいのかもしれないが、あるいは留学する機会があるとなにか違うのかもしれない。」

●「数学を研究しているが、数学をやると大学院生レベルで読み書きはほとんど英語(仏語も少し必要かも)になる。」

●「海外で対等に意見を述べ合うには、英語の表現力が必要である。それができる日本

人が、日本の学界で偉そうにしている。」

●「英、米国の人がもう少し非英語圏の人に配慮してくれると良いのですが… フランス人やイタリア人と英語で話をする方がむしろリラックスできて良いです。」

●「日本人は英語が苦手なので、ネイティブな人と比べてかなり損をしている(論文を出すという意味で。)ただ、若い世代の人は当時の自分より明らかに英語が上手になっていて、必要性を認識しているのかもしれないと感じています。」

●「専門分野としては比較的英語を要求されることは少ない。個人的には留学生を受け入れなければならない状況にならない限り、英語を用いるのは最小限にしたい。日本人の学生の日本語での作文能力を鍛えることの方が重要ではないかと感じている。」

●「研究発表について。友人の研究者(ネイティブ)に聞くと、英語力ではなく、内容により理解しようとするか、相手にしていない(集中して聞きとろうとしない)かが決まるようである。ひどい発音でも、スライド画像から重要だと思えば、必死で聞いて理解しようとしているようである。(それでも分からない場合は、発表者へ質問に行ったり、私に聞きに来たりしている)」

●「日本語より英語のほうがシンプルで、理系では研究内容を伝えやすいと思う。ただそれとコミュニケーションは別である。」

●「生涯学習で頑張るしかないと観念しています。」

●「研究論文を日本語で書けたら、日本発の研究発表はもっと質も量も増えるのに、と思う。」

●「教室の学生のほとんどが留学生のため、セミナー、講義とも英語で実施している。個人的相談もすべて英語である。国際学会、国際研修会の講師をすることもあるが、「英語」を「共通語」にすることに不平等感を持っている。本当に現地で情報を必要としている人・一般集団(例・アジアの途上国等で)は英語を話せない。学会や研修会に参加できるのは英語のできる富裕層だけである。」

●「英語は絶対必要。研究者になった以上使いこなさなければならない。英語のせいで欧米に遅れをとっている場合もあると思う。」

●「日本人の英語が、他の英語を母国語としない、外国人の英語に比べて特に劣っているとは思わない。独仏伊露等の研究者の英語は時として平均的な日本人研究者よりも劣っていると感じる。例えば、多くのオランダ人は数ヶ国語を流暢に話すと思うが、オランダ人にとってそれが必要だからだと思う。ただ、英語での発表がバリアになっているとおもうので、サポートがあれば、日本の研究がより国際社会に貢献できると思う。」

●「最近の学生は特に論文を英語で書く能力が乏しいように思える。これは英語だけの問題ではなく論理的に文章を書いていく能力が乏しいだけかもしれません。」

●「英語能力の向上は極めて重要ですが、学内業務(教務, 入試, 教員ユニット, 会議etc)に忙殺され、自己研鑽する時間を確保することが困難となっており、研究そのものがままならない状態となっています。まずは教員の労働の現場を改善しないことには、その先に進むことは非常に困難である気がしています。」

## (2) 英語を習得し使用することの苦労を表明しているもの

●「ライティングはあまり困っていません。スピーキングに特に困っています。」

●「ポストドク時代、UKの研究者、ポストドクの論文の理解力、速読ぶりに、相当くやしい思いをした。」

●「私はアメリカの大学(学部)を卒業し、英語の論文作成の訓練を受けてきているが、それでもnative levelで論文を書くのは難しく、自信もない。」

●「キャリアが長くなると英語のリーディングとライティングにはそれほど困難さは感じなくなるが、フォーマル・インフォーマルなやり取りでときどき不安になる。」

●「日本人も例外ではないですが、ネイティブではないスピーカーの講演で、特になまりの強い英語はなかなか聞き取りに苦労する。いわゆるスタンダードなヒアリング教材などではなかなかそうした聞き取りを訓練することはむずかしい。実際に学会に出かけて行って場数を踏むことでしか対応できないのかもしれない。」

●「ある程度英語は出来ますが、突っ込んだ議論が要求される場面においては、しばしばネイティブスピーカーとの違いを感じます。一生勉強していかなければならないと考えています。」

●「ネイティブレベルのヒアリングは困難。英語勉強にさける十分な時間がない。」

●「冠詞と文体の統一に苦労しています。」

●「フレンドリーに外国人研究者と付き合うのは私には無理。性格の問題のような気がする。大変です。」

●「ノン・ネイティブの英語は非常にコミュニケーションがとりやすいが、ネイティブの英語はやはり聞き取りにくい。」

- 「ライティングは自分で身に付けることが出来るが、スピーキング、リスニングは留学しないと習得するのは難しいと感じる。スピーキング、リスニングを身に付けるために、英会話学校に通う「お金」と「時間」がない。特に「時間」が無い。そのため研究活動を通じて、スピーキング、リスニング力を向上できる方法を開発してほしい。研究活動以外の時間がほとんど確保出来ないので、英語力を向上させたいと願っていても、勉強する時間がほとんど残っていない。」
- 「聞き取り能力の不足を常に痛感する。」
- 「海外留学の経験のない自分にとっては、常に壁のようなものを感じている。英会話のレッスンを、長期間受講しているが、どこか(英語力に対して)自信を持ってないでいる。」
- 「非英語圏、かつ言語学的にも遠い日本語を母語とするハンディキャップは常にひしひしと感じています。とはいっても王道はなく、少しずつ努力していくしかないのでしょうか。」
- 「リーディング以外のスキルを身につけることに苦労しています。中高からそのようなスキルを身につけておけば良かったと思っています。」
- 「ネイティブではない我々にとって、微妙なニュアンスを表現するのは非常に苦労が多い。」
- 「英語は中学生の頃から苦手です。私が大人になる頃には自動翻訳機ができていたのですが、もう少しかかりますね…。日本語でいろんなコトバのニュアンスを気をつけながら話したり書いたりしていると、それが全然ぴんとこない(私にとって)英語は、言語ではなく、パズルのようなものです。Readingはパズルでできるのですけど。」
- 「研究の専門分野の知識だけでなく、英語力の向上のためにも、海外の研究機関で博士研究員等として留学してみたいという気持ちはある。しかし現在では、一時的に休職して留学しても日本国内でポストが保証されているわけではなく、配偶者や子どもがいる場合、二の足を踏んでしまい、残念に感じる。」
- 「英語圏に年単位で住まないとうとうしようもないかなと思っています。」
- 「個人的にはそれほど困っていないが、学生の英語レベルの低いものが多く、学生の英語の指導上の困難などもアンケートされると良かった。(周辺の教員もあまり困っている人はいないようです。)大学院、研究者になってから論文などで正確な英語を学習するのは難しい印象があります(必ずしもよい英語ばかりではないので。)大学時代など(専門課程)、指導教科書が英語中心だったので、それがだいぶ役に立っている気がします。」

(3) 研究者は英語をどのようにとらえるべきか、あるいは英語の学習にどのように取り組むべきか、という問題について一定の見解や提案を示しているもの

●「英語の通用度を考えると、英語の能力を身につけることは研究者にとって望ましいが、語学の能力は研究者としての素質との連関がない場合もある。英語だけ得意なものが、国内の学術成果について質の高くない発信をされることも、英語ができない有能な研究者が肩身の狭い思いをすることも望ましくない。英語が苦手なものに無理に英語能力を身につけさせるより、異なる能力を持つものが互いに協力して相補う関係を作ることが望ましいと思っている。また、英語以外の言語の軽視は学問の水準の低下を招く（現に、われわれの分野の韓国がその傾向にある。）」

●「研究者としての英語は手段であって、目的ではありません。専門分野の議論では、ネイティブであっても、論理が通らない英語で、しどろもどろになる場合もあります。日本語でやっても同じことです。要は、いかにして自分の考えを明確に相手に伝えられるかということだと思います。」

●「読み書きは学力の問題 会話は英語力ではなく人間性の問題。区別して考えるべき。日本語以上に英語は上手にならない。」

●「英文での記述・評論にはロジックが重要であり、これは日本国内で日本語で日常的に会話・討論しているだけでは身につかない。」

●「学生の頃からどんどん海外の学会に行き研究者と交流することが大切。モチベーションにもなり、世界が広がる。/研究室に留学生を受け入れることで英語を話すという敷居が低くなる。」

●「博士課程在学中に1年間留学した。その時はつらかったが、その経験が今生きていると思う。研究者を目指す若い人も、積極的に留学してほしい。/研究者になるかどうかに関わらず、大学に在学中に何度か英語で発表する経験を作るのが教員として必要だと感じている。」

●「私はPhD取得後、米国に留学したのでその分英語は身についたと思います。毎日英語ばかりの環境に生活しないと、よほどの努力をしないかぎり抵抗なく英語を扱うまでには至らない気がします。自分が受けてきた日本での英語教育の不十分さを、米国に行って改めて実感しました。英語はworld standardである以上、小中学校の頃からnative speakerと会話できる環境がもっと増えると良いのではないかと思います。」

●「リスニングとスピーキングの力を養うのは無理やり学会に参加させることだと思う」

●「結局こつこつ積み上げていくしかないと思っているのでやはり外国語圏の人々と交



## 流するのが近道」

- 「英語を使える人でも、英語で伝えるものを持って人ではない場合もあり、結局、英語はテクニックの一つだとは思う。したがって、パーティーなどのインフォーマルな場での会話は、その人の教養などが問題となると思うので、そのような英語は各自で取り組めば良いと思う。が、論文作成や、口頭発表などの英語をあくまでテクニックとして学習できるシステムがあると役に立つと思う。」
- 「英語の論文を読む、書く、ということについては、学生のうちから日常的におこなっているため、自然に身に付くものと思われる。しかし、聞く、話すということは、そのような機会がなければ上達しない。国際会議への参加や海外からの研究者によるセミナーなどを通じて、何とか使えるレベルが身に付いたとは思う。結局、必要があるからこそ身に付くものであり、日常的に英語を使う機会を増やすことが重要であろう。国際会議を開催しやすくする、日本の大学に外国人研究者を増やす、といったことが、研究者にとっても学生にとっても、英語に慣れるよい環境を作ることに繋がるはずである。」
- 「日々の精進を怠らないよう努力したいです。」
- 「英語でのコミュニケーションは必須であり、ぜひとも技能を高める努力が必要と考えています。」
- 「自分でトレーニングすればある程度は克服できる。」
- 「本当に英語の力をつけるには独学しないといけないと思う」
- 「下手でもいいから、経験を積むことが大事かと。」
- 「専門分野の論文作成には、経験が必要である。」
- 「語学勉強してからのぞむよりは、とりあえず、現場に乗り込んで苦戦して必要性を実感した段階で適切なサポートがあると素晴らしいと思います。」
- 「一年間、カナダへ研究留学していましたが、思ったほど英語力は向上しなかった一方で、努力し続けることも大切だと感じた。」
- 「多くのシチュエーションでいわゆる英語力が問題なのではなく、コミュニケーションをとろうとする熱意が大事なのではないかと思います。論文を書くことについては正確な英語を使う力は必要ですが、言語と関係なく「作文力」が80%くらいを占めると思います。英語で論文が書けない多くの学生は日本語の論文もかけません。また英語でコミュニケーションがとれないと悩んでいる人の多くは日本語でもコミュニケーションをとることを苦手としているのではないのでしょうか？」

●「国際的な交流で英語は必須だと思います。しかし、安易に日本語の文章に英語(英単語)を使い、文章の意味が分からない場合をよくみかけます。英語はもちろん大切ですが、まずは日本語を正しく使い、英単語の意味も正しく理解した上で、言語を使って欲しいと思います。」

●「論文作成などライティングについてはレベルの向上があればあるほど望ましいが、スピーキングに関してはハイレベルを必要以上に求める必要はないと思う。必要なのは、きれいな英語をしゃべる能力ではなく、いかに自分の意見を表明していくか(研究の発表の場、インフォーマル、フォーマルなパーティーどちらでも)であり、そういう現実を理解する必要がある。このような誤解の最大な原因はテレビに出ているような英語研究者、教育者の発言であり、このような方々の自己反省を求めたい。」

●「研究者になるような人々は、基礎学力はあるので、英語の知識は十分あるはず。ただ、それを使う機会があるかどうかというのが大事だと思います。私は個人的に、気軽に英会話を楽しめる英会話カフェに通っていますが、そのようなものを学内でも作ってくれたらありがたいです。」

●「poor Englishを公用語としてほしい。」

●「大学受験の英語で十分、議論はできる。」

●「自然科学や一部の社会科学のように言語文化の影響のない領域と人文科学のように言語文化の多様性そのものが学術の基盤となりうる領域を区分せずに「英語」だけにくくるのは、課題の狭小化に繋がるのではないのでしょうか。多言語の世界の現状を反映しうる設問を考慮いただければと思います。」

●「研究者の優秀さとか、才能は語学がすべてではない。英語のほうが仮に弱くても、良い発想や考え方を持っている研究者は多いので、すぐれた自動翻訳機などが開発されれば、日本人のハンディーは少なくなるだろうと思います。」

●「研究者に英語が必要であるのは間違いないが、国内の研究所等において公用語を英語にする等、英語の問題のみで日本人の研究者の就職先を狭めてしまうことは、個人的には反対である。というのも、新人研究者が英語でのディスカッション等に慣れるまでは、時間が必要であり、最初から公用語が英語ではハードルが高いと考える。」

(4) 英語教育について、あるいは研究組織のサポートについて見解の提示あるいは何らかの提案を行っているもの

●「語学学習ではなく、単位/学位取得のための留学を促すことで海外で書く・発表す

る体験を積み重ねることが有効ではないか。」

●「大学院レベルの英語による論文作成の講習の必要性を日々痛感しています。」

●「高等教育(大学, 大学院とも)全般に英語教育が不足しているように思われます。回答者が専門とする有機化学においては教科書は英語版を買うことを推奨していますが, 学生への浸透はあまりしていないようです。分野により多少の差はあるとは思いますが, 将来の論文読解, 作成のことを考えただけでも英語教育の推進は必要だと思われます。ただし英語の訓練をする時間を増やすよりも, 普段の講義から英語教育を兼ねて取り入れて行くほうが理想的と考えます。」

●「英会話教室とは違う, 学術目的に沿ったコミュニケーションのための英語コースやセンターは, 今後ますます必要になるのではないかと。また, 大学関係者のみならず, 社会人留学希望者なども受け入れるような, 開かれた環境が望ましいと思われる。」

●「コミュニケーションは必要不可欠。大学院教育はテクニカルライティング, 科学コミュニケーション等に時間を使うべき。ほとんどないのが現状である。」

●「大学生・大学院生のうちにacademic writingとpresentation(できればlisteningも)を授業・演習の一環として盛り込むことは, 非常に有意義かつ必要なことだと考えます。大学院生に書かせる英語論文があまりに拙いからです。また, 自分の英語ライティングのスキルレベルが極めて低い, ということを大学院生ですら認識していません。(せいぜい, 大学での英語の授業成績くらいしか評価基準がないからでしょう。)従って, 私が所属する研究室の場合, 学生の論文ドラフトを全て教官が書き直していますが, これが非常に負担です。一定レベルの英語ライティングスキル(いわゆるscientific writing, 海外の大学で授業として行われているもの)は, 大学3~4回生で習得できるようになるととても良いと思います。そのためのコースを必修にするくらいが, これからの国際社会では不可欠では, と考えています。(それくらい, 学生は英語での表現力に拙いです。)」

●「私自身, 翻訳(実務翻訳)の仕事をしていましたが, アカデミックライティングは別物であるため, 適正なトレーニングが必要だと感じるし, それを受ければ意識も変わって発信できるようになるのかな, と思う。」

●「私の研究が英語圏の高校レベルの学校を対象としているため, 英語でのコミュニケーション能力は必須です。私は帰国子女でもなく, 留学経験もないので, なんとかコミュニケーションはできる程度にはなりましたが, 学術英語は日本語と同じく, 性質が異なるため, 特別に訓練を受ける必要があると考えます。ここ数年, 私の所属大学のGCOEで英語での国際学会発表にあたり, 論文添削補助の費用が出るようになりましたが, 私は支給対象ではない(身分的に, ポスドク)ため, 交友関係に頼らざるを得ない状況です。ある意味, 今時のポスドクは英語が使って当たり前のようなところもあるようですの

で、ポストクも含めたアカデミックライティングの充実が必要なようにも思えます。」

●「研究における英語は、語学における英語と全く異なっていると感じます。つまり、表現も大事だが論理や内容がもっと重要であり、展開力が求められるように思います。そういう意味では、表面上の英語教育だけでは不十分で、討論のやり方等の技術が必要と感じます。これを英語教育と一緒にまとめて考えてしまうのは大変なように思います。」

●「大学院生が英会話の必要性を感じたときに、気楽に相手をしてくれるネイティブの担当者がいるといいかも。」

●「イギリスに3年近く留学しましたが、英論文執筆にはネイティブ・チェックが必要だと感じています。制度面の整備がさらに進むことが望ましいと思います。」

●「日本人だけで英語で発表とかしても向上しないし、面倒なだけ。」

●「日本人はspeakingがダメだがwritingができるとは昔からよく言われることだが、最近はずしもそうではなく、学生の英文を添削していても基礎がまったく身につけていないケースが多い。教育現場でも試行錯誤されていることとは思うけれども、基礎ぐらいいは(会話できればいい、というのではなく)高校までで教えておいてもらいたい。大学生が時制や活用もままならない状態ではそもそも研究を始められない。自戒も込めつつ。」

●「理系研究者向けの情報(本など)は多くあるのに文系のが無いのは異常だと思う。」

●「一定レベル以上の英会話スクールetcが欲しい。(一般的なところはレベルが低いし、ある程度のレベルになるとビジネスに特化したものが多い)」

●「翻訳に関しては、非常に料金が高く、専門分野を十分理解していない場合、論文の質を下げてしまうことがあります。ですから、大学で研究者(特に研究費の少ない若手)への十分なサポートシステムをつくるのが、大学全体の研究者の質を上げ、外部(海外)へのアピール強化に繋がっていくのではないのでしょうか。」

●「英語力の向上は必須であるが、それはあくまでも個人の努力に委ねられている。論文添削等がシステムとして構築されれば、大変有意義だと思う。」

●「英語の徹底化よりも、各国の人が各国の母国語で情報交換ができるソフト開発・人的支援を望んでいる。人は自分の母国語でのみ自分の真の思いを伝えられると考えているので、各国の人が自分の母国語で他国の人と不自由なく交流できるシステム構築に期待する。」

## まとめ

本アンケートは、日本の研究者が英語に関して直面している状況を調べ、支援のための手がかりを探るために実施したものであった。この趣旨に照らして興味深い事実が、寄せられた回答から見えてきた。個々の設問に対してのコメントは、本報告書の本文で記述した通りなので、ここでは、いくつかの重要な項目を立てて全体のまとめを行いたい。

まずはじめに、そもそも回答を寄せていただいた方々の大部分は、日常的に英語で論文を書いたり国際学会で発表するなり、世界へ向けて活発に発信している研究者であり、英語との関わりがきわめて深い人たちである、という事実が集計作業の最初に見えてきた。このことを踏まえて回答内容をとらえることが重要である。つまり、前述した通り、この種のアンケートに多忙な時間を割いて回答していただけるのは、英語に対する関与が相当に深い方々であろう。これは、かならずしも英語そのものに学術的興味をもっていたり、英語の重要性を積極的に認めている等の理由よりもむしろ（記述回答の一つにもあった通り）、必要だから関与せざるを得ない、といった日本の研究者の現実から来るものであろう。したがって、現実の問題に直面している研究者の場合には、自分にとってどのようなサポートが必要かについてもよく見えているはずである。そのような意味で、320名という今回の回答数から、重要な多くの事実を読みとることができたと考えられる。

次に、重要な事実として把握できたことが一つある。研究者の多くは学術研究に必要なとされる英語運用能力の訓練を十分に受けていない、という事実である。詳しく言えば、大学院博士前期・後期課程の段階において、学術研究というキャリアに向けての教育・訓練を受けるはずであるが、学術英語に関しては、きわめて乏しいものしか提供されていない、ということがわかる。一方で「英語で論文を書かなければ業績として認めてもらえない」という回答に見られるような厳しい現実があり、他方で、その要請に応えられるような技能を十分身に付けないうまま大学院教育を終了し研究者としての業務を行いながら途方に暮れている、という状況がある。アンケートの回答には「特に困っていない」といういわば優等生的な応答もあったが、サポートの提供という観点で現場の生の声に耳を傾けようとした場合、「苦勞している」「困っている」という応答に対してその具体的な苦勞の実態を探りたいと考える。ただ、「苦勞している」「困っている」という声は十分聞き取ることができたが、その実態の具体的な個々の側面については、この種のアンケートの性質上、十分調査できなかった。個別に調査することが今後の課題である。

サポートの可能性については、講習会、ライティング支援ツールの使用、英文添削業者の利用、学内における支援設備の設置等々の設問について、様々な回答が寄せられた。これは本文で個別に見た通りである。このうち、英文添削業者の利用については、サービスの質、料金等に関する細かい設問を設定したため、回答から多くの事実が見えてきた。ただし、個々の研究者が予算の範囲内で試行錯誤しながら個別に利用しているという現状があり、その背景には、商品を介した「業者⇄消費者」のやり取りが存在することは否めない。ライティング支援を、外注による添削という方面に求めるのであれば、

マーケットという場所で、質と価格の対応を測りにかけながら利用者（消費者）としての自立した立場を自覚することが重要だと思われる。回答者の中には、このような事実を認識した上で自立的な判断を行っている人たちと、そうでないと思われる人たちが混在していた。

この方面については、学内のライティング支援設備の可能性も探ったが、評価する回答もある一方、「必要ない」という反応、あるいは、個別の専門分野におしなべて対応できるセンターのようなものが機能するかどうか疑わしい、という反応も見られた。設置には予算の裏付けが必要なため、その意味での現実的課題も残るが、対応できる業務内容を限定した上で試みる価値はあると思われる。このアンケートと付随しておこなった調査では、大学の研究者向けのライティング・サポート設備は、現時点、国内ではほとんど見られない。

さて本調査では、研究者に対して組織的な教育（あるいは再教育）を提供するプログラムを具体的に検討することを前提としていない。そこで、あくまでアンケートの回答から見えてきた支援の方向性だけに着目するが、一つだけ、今後、この件を検討するにあたって興味深い方向が見えてきた。それは、英語に関して特に大学院生や若手研究者の教育はどうあるべきか、という問題に関して披露された複数の回答者の見解に見られる。場数を踏むこと、すなわち、学校で身に付けた英語の基礎能力を現場で使用しながら、いわば「実地の訓練」を受けることがなによりも手堅い教育になる、という見解である。日本の学校における英語教育には、現実の現場で使用する機会が絶対的に欠けている。言語は現実の場面で使われた時に最も豊かに作用する。現実の状況とともに言語を使用することは、有効な言語学習の大前提である。学習内容が教室内での人工的な環境で閉じている、という学校教育の実態を眺めてみれば、上記のような「場数を踏む」というきわめて素朴な学習法も、研究者という自立した学習者にとっては、教育プログラムや講習会などより有効かもしれない。研究者は、高校生や大学生よりもはるかに多くの使用機会に囲まれている。つまり、生々しい現場が眼前にあるのである。もちろん、語学の問題以前の、現場に飛び込んでいくかどうかという問題は個々人の意志の問題である。

なお、記述回答の中に、組織的なあり方を示唆する事例がいくつか紹介されていた。それは、大学院の研究室単位で留学生や海外からの研究者が多数在籍している環境では日常的に英語を使う状況が存在し、それが一定の教育作用を生んでいる、という事例である。大がかりな研究室を維持している理工系の学部・大学院ではそのような状況が他にも報告されており、研究室単位での取り組みが期待される場所である。

実地の機会から学んでいくという着眼には、記述回答の中で指摘されている通り、研究者にとってやむを得ない理由がある。なにしろ「忙しい」——「（日常の研究活動あるいは学内運営の雑務のために）英語に充てる時間がない」——このようなぼやきも多く聞かれた。学術的ライティングやディスカッションは高度な技能が必要で、その習得には相当の時間と労力がかかる。とはいえ、個々の研究分野からみれば、英語技能という周辺的な課題のために講習会に参加したり特別な教育・訓練を受けることは難しい。アンケートの設問には、講習会等の企画があればぜひ参加したい、等の積極的な回答が多く寄せられはしたものの、上記のような現実をよく見据えた上で、サポートの可能性を探ることが重要だと思われる。もちろん場数を踏めばそれだけで上達するという単純

なことを信じている人は少ないであろう。実際にぶつかった問題を解決するためのフィードバックをどうするか、というところでサポートの提供が求められるのではないだろうか。そのシステムづくりの検討は今後の課題であるが、アンケートの設問設定の段階では予想していなかったこのような方向が見えてきたことは、今回の重要な成果であった。

今回、現状把握という点では、一定の結論を明確に打ち出すことが出来るほどデータが得られたとは言いがたい。今回の結果をもとにしてさらに多方面にわたる綿密な調査を行うことが必要である。しかしながら、個々の設問の分析から垣間見えること、そして上記のまとめで指摘したいくつかの点は、今後、この方面の課題に取り組むにあたって、有力な着目点になると思われる。